
晴れのち曇り、ときどき魔法。

鮎坂カズヤ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

晴れのち曇り、ときどき魔法。

【Nコード】

N5263C

【作者名】

鮎坂カズヤ

【あらすじ】

「とんでもない田舎」と聞いて、どんな想像をする？遊ぶところがない？つまらない？退屈で死にそう？まあそんなところだろう。でもここは違う。はっきりと断言できる。オレが引っ越してきたこの田舎は、そのままの意味でのとんでもない場所だったんだ。なにしろこの村には、『魔法』が存在するんだから。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

第一話 : 火柱と座敷童といじめっ子

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。ココは間違いなくヤバイ。

ごく一般的であると自負できるオレの中の常識がそんな警鐘を鳴らしたのは、この土地にたどり着いてからわずか三十秒後のことだった。

電車やバスを乗り継ぎまくってようやくたどり着いたその地、
あまのえ
天之恵。

『天の恵み』なんてなかなか粋な名前の土地だな、と思ったその瞬間だった。

ズドドドドドドドドーン!!

「……………は？」

火柱。どこからどう見ても火柱。

五十メートルくらいの高さにまで到達するほどの煌々と燃え盛る火柱が、バス停から少し離れた畑から吹き出していた。

「……………な、なんだよあれ。何がどうなってんだ？」

ただでさえ信じられない光景を目の当たりにしてるのに、オレの真後ろで飛び交う会話が、オレの中の常識をさらに追い詰めていく。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「あんれま、キクさんとこの畑から火い吹いとるよ」
「ありがたやありがたや。今日のマホウは一段と元気さね」

「……………『マホウ』？」

常識がヤバイヤバイと警鐘を鳴らし始めたのは、そんな時だった。

「転校生の中津茜シユウくんだ！ みんな仲良くな〜！」

教室に入った途端に集中する視線。それだけでも憂鬱な気分ですばいだったのに、嫌味なまでに豪快な担任の声がさらに耳障りだ。クラスメイトたちからはまるで値踏みするかのような好奇の視線がいやってほど飛んでくるし、「やつぱり都会の奴は雰囲気違うな」とか「なんかカツコつけてんな〜」とか、お前らわざと聴こえるように言ってるのかわつてくらの声で話しあってるのも気に障る。

その中でもやけにデカイボソボソ声の一つが、耳を通り越して脳内にダイレクトで突き刺さった。

「あいつ、絶対イジメられてこっちに逃げてきたんだぜ」

声のした方を睨みつける。いかにも田舎者って感じのぼさぼさ眉毛の男子がそこにいた。

惜しいな、ぼさぼさ。確かにオレは逃げてきた。だけど、理由はそれとまったく逆だ。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「どうも初めまして。中津茜^{シユウ}です。オレがこつちに引越してきたのはイジメが原因です。ちょっとした遊びのつもりだったんだけど、なんか相手が自殺寸前までいっちゃって、周りから変な目で見られるようになって居づらくなっただんでこつちに逃げてきました。もしかしたらこの中の誰かを同じ目に合わせちまうかもしないけど、まあ仲良くしてやってください」

シンと静まり返る教室。啞然とする担任。オレの言葉にビビったのか、黙り込むガキ共。

なんだ、静かになれんじゃんお前ら。ああ、爽快。

「んで、オレの席はどこですか？」

「……あ、ああ。中津の席は火野の隣の席だ」

「はい。……んで、火野ってやつのはどこですか？」

「こつちだよー！」

頭にキンキン響くような甲高い声をあげながら、見た目小学生くらの背丈のおかつぱ頭の女がブンブンと手を振っているのが見え、気がした。

おいおい、確かここは高校生のクラスのはずだよな？　なんで小学生がいるんだ？　それともアレが座敷童ってやつか？　この村には座敷童が当たり前のように闊歩してるなんて言うんじゃないだろうな。

「あつしが火野でござんす　よんろしくね、シユウちゃん！」

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。こいつは絶対にヤバイ。

この村に来た初日に感じたのと同じ危機感。あの時のデカイ火柱とは真逆のチビっこい女にそれを感じるなんてちょっとしたパラド

ツクス。ちなみにこれ、オレの一番嫌いな言葉だ。

「あの元気満タン娘が火野まあ子。あいつの隣の席が中津、お前の席だ」

担任までもが信じられないこと言っただけだ。

あいつの隣に座れだ？ あの座敷童に取り憑かれると？ 自分を「あつし」なんて呼ぶ脳天パー子のあのキンキン声を誰よりも近くで聞いてると、そう言いたいのか？

「まあ、運命だと思って諦めてくれ。ガッハッハ」

考えてることが顔に出ていたのだろうか？ それともこの担任もオレと同じ印象をあいつに抱いているのだろうか？ それならなぜわざわざあんな特等席を空けておくよ？ 地藏かなんか座らせとけ。一つや二つあるだろ、こんだけ田舎なんだから。

「ほらほらシュウちゃん、こっちこっち〜！」

ヒソヒソ声が響くと言うなら、あいつのキンキン声は轟とどろくって言うんだろうな。単純に、うるさい。

周りの皆の視線を感じる。最初は好奇。あいさつの後は怪訝。そして今は哀れみの視線ってところか。要するに、ていどいいイケニエ。進まない気と足を無理やり進ませて席に着く。ふと視線を横に向けるとそこには満面の笑みを浮かべてこちらを見つめる座敷童。…そんなに見つめられてもため息しか出てこねえぞ。

「ねえねえ、シュウちゃん、シュウちゃん」

「シュウちゃんって呼ぶな」

「シュウちゃんは都会から来たんだよね〜。どっから来たの〜？」

東京？ 東京？」

「聞こえなかったか？ シュウちゃんって呼ぶな」

「あつしはね〜、生まれも育ちもこの天之恵なんだよ〜！ シュウちゃんまだこつち来たばっかだよな？ こつちでお隣さんになったのも何かの縁さ、今度いろいろ案内するよ〜！」

「……オレさ、いくつか嫌いな言葉があるんだけど」

「嫌いな言葉？ なになになに〜？」

「無遠慮、凶々しい、矛盾、バカ、思い上がり、馴れ馴れしい」

さて、この座敷童にも少しは嫌みが通じるかな？

「ふえ〜、そうなんだ。えへへ、ちなみにあつしはね〜、バナナが好きだよ」

……通じねえ。動じねえ。嫌いな言葉の話してんのに好きな食べ物に話が飛ぶその思考がまったく理解できねえ。ここまで『予測』が出来ない相手は、初めてだ。

呆気にとられるオレのことなどおかまいなしに、座敷童のような同級生 火野まあ子は耳につくキンキン声を誰にはばかることなく轟かせ続けた。

第二話 : 予測外の存在

『予測』 それこそがオレのもっとも得意とするもの。誰にだってある力。だけど、オレのそれは少し他人よりも強かった。

例えばケンカ。相手がどんな攻撃をしてくるか、どこを攻撃すればどこがガラ空きになるか、そういったことを予測するのはそう難しいことじゃない。腕力が別段強いわけでもないオレがケンカで負けたことがないのは、ひとえにこの『予測』のおかげだった。

もちろんどうすればそんな事態に巻き込まれないかも予測できないこともない。だけど、まだ予測するための情報が少ない時はどうしようもないわけだ。オレの自己紹介でのあいさつにムカついたクラスメイトの一人がケンカ吹っかけてきた、今のこの状況みたいに「行くぞオラア！」

さあここで予測だ。まっすぐ走りながらしてくる攻撃とえば？ 選択肢は大抵三つ。殴る、蹴るの『打撃』。タックルなどの『組み付き』。後ろで控えている他の仲間にボコらせるための『捕獲』。その中の選択肢のいくつかを潰せば自ずと予測は絞られる。さあ、一つずつ潰していこうか。

「！ うわッ！」

一瞬、突進する素振りを見せたところで相手の上体がほんの少し怯んだ。

この体勢から組み付きはないな。捕獲もやムリっぽい。なら打撃、バランスの崩れていない利き足での前蹴りってところか。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

ほら、正解。

予測通りの攻撃なんて目をつぶったってかわせる。後に残るのは前蹴りをかわされてさらにバランスを崩しかけている相手の身体。

……もつと考えてから行動しろよな。

軸足である左足首を横から思い切り蹴飛ばす。一瞬宙に浮いた相手の身体が左肩から地面に落ちていく。

「ぐあッ！」

「ずいぶんきれいに転倒するなお前。アクション俳優になれんじやねえの。転ぶ専門のな」

「こ、このヤロ……！」

さて、一人に構ってるヒマないな。まだ周りには四、五人いるんだし。

まったく、ちょっと生意気な転校生をその日のうちに校舎裏に呼び出すなんて、いつの時代の不良だよ。そのうち気合の入った髪形の裏番とか出てくんじゃねえの。

「おい転校生。あんまチョーシくれてんじゃねっぞ、ああん？」

おいおい、マンガの読みすぎだ。しかも結構古めのもん読んでんな。

時代錯誤感をさらけだしながら残りの四、五人が寄ってくる。まったく、最初からそうやって全員で攻めてくれば簡単にボコれるだろうに、なんでこういう奴らって一人で相手を倒したがるんだろうな。メンツとか意地の問題だろうか。それはこいつらにとってどこまで譲れない部分なんだろうか。今度調べてみようかな。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「なに余裕かましてんだよ！ この人数相手に勝てるワケねーだろーよ！」

おっといけね。ついつい熟考入っちまった。

周りを見渡すと、キレイに円を描くようにオレを取り囲む不良たちの姿。最初にかかってきた奴も加わって結構壮観な画だ。ふむ、なかなか効率的。どこからでも相手の背後をとれる大人数ならではのフォーメーションだ。

だけど、遅かったな。最初からそうやってればまだ間に合ったのに。

「くら〜！ お前ら何やってんだ〜！」

校舎裏に担任の豪快な声が響き渡る。こんな時以外にあまり役に立たなさそうだな、あのがなり声は。

「うわやっべ、ゴリだ！」

「くそ、逃げるぞ！」

「覚えてろよ、転校生！」

お前らも人の名前くらい覚えろよな。さっき教室で自己紹介した。それに担任の名前も覚えてないのか？ …… オレも覚えてねえけど。

三々五々逃げ出す不良たち。ゴリと呼ばれた担任がオレのところにとどり着いた頃にはもう後ろ姿すら見えなくなっていた。

「おい、中津。大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。ただカラまれてただけです。別に誰かをイジめてたわけじゃないんで、そっちの意味でも大丈夫ですよ」

「なッ……！！」

『中津が校舎裏でさっそく誰かをイジめてるみたいです』

不良たちに呼び出される前にそんな匿名の手紙を担任の机に書置きしておいた。まさかここまでナイスタイミングで現れるとは。…自己紹介でのインパクトが強かったせいかな。ま、予測の範囲内だけ。

「……中津、あの話って本当のことなのか？」

「あの話ってイジメのことですか？ ……ウソですよ、もちろん」

「な、なんだウソか！ ワツハツハ、やっぱりな〜！ やけに真実味がある言い方だったから先生騙されちゃったぞ！ ワツハツハ〜！」

何がそんなに満足なのか、豪快な笑い方のまま去っていく担任。もちろんウソですよ、先生。 たった今アンタに言ったことが。オレは確かにイジめてた側だった。それも、一人で大勢を、だ。自分の予測が次々と当たっていくことに快感を覚えていた。周りの皆が自分の手の中で踊ってる気分。神にでもなったつもりでバカみたいに予測しまくって、周りの皆をいのように操ってる気だった。

もちろん予測が百パーセント当たるワケじゃない。ただの確率の問題。 そうなりやすいだろう状況を想定して対処するってだけの話。超能力者でもなければ魔法使いでもない、テストのヤマが当たって喜んでもクソガキと同じようなもんだ。 もちろんそのヤマが外れた時にはそれ相応の面倒がやってくるわけだ。 今回の転校の原因のように。

「……さて、あいつらが次の行動起こす前に対処しとくか」

まずはこの土地の地理を知ることが先決だな。集団で地の利を生かされたりなんかしたらさすがに不利だし。

「でもさすがに一人で歩き回るのは効率が悪いな。誰か案内してくれる奴がいてくれると助かるんだけど」

「ふむふむ。そういうことならあっしの出番でやんすね」

……後ろから聞き覚えのあるキンキン声が聴こえた気がした。

いや、気のせいだ。気のせいのはずだ。あんな騒がしい奴が一切の気配も何も感じさせずにオレの背後にいるなんて信じられるわけがない。きつとアレだ、これが白昼夢ってやつだな。もう放課後だけだ。

「それにしてもシユウちゃん強いね！ 五、六人を相手にしてものに全然物怖じしねえんだもん、それどころか手玉に取ってたって感じさ！ アハハ、お手玉お手玉」

「……いつからそこにいた？」

「はえ？ ずくとずくと居たさ。シユウちゃんたちが来る前からここで日向ぼっこしてたし。そしたら突然ケンカ勃発！ まあ子は手に汗握りながらいつ先生を呼びに行くか、どれくらいシユウちゃんかボコボコにされたら助太刀に行くか、今日の晩御飯のメニューは何じゃろホイとかいろいろ思案しながらこの成り行きをジッと見守っていたさ！ 結局シユウちゃんの勝利で終わっちゃったから『クソ、恩を売って三倍にして返させてやろうと思ったのに』とかのまあ子の企みと言う名の小さな望みは叶わなかったわけで。あゝ、かわいそうなまあ子。シクシク」

「……………」

「そしたらシユウちゃん衝撃の眩き！ 『誰かこの村を案内してくれる奴がいてくれると助かるんだけど。できればあのかわいいまあ子ちゃんだとよりいいんだけど』なぐんて本人が後ろにいるとも知

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「らずにまさかのカミングアウトさ！ いや、さすがのまあ子もそりゃテレちゃうさ、テレちゃうさ。いや、くん」
「……………」

「一つ勉強になったな。どうやら座敷童ってのは妄想癖を持っているようだ。しかも、結構タチが悪いやつ。」

「しかし悲しいことに、オレはこの妄想癖の脳天パー子の力を借りなくてはならないようだ。」

「この村で親しくなった奴なんてもちろんいないし、さっきの不良たち以外のクラスメイトはあの自己紹介のおかげでオレに近寄りもしねえし、下宿先のおばさんは仕事で忙しそうだし、この妖怪女の外に案内を頼める奴がいないというヤバイ状況だ。」

「……………自己紹介の時にこうなることを予測しておくべきだったな、クソ。」

「おい、座敷童」

「誰がリアデイズンだー！」

「言っただけでねえし、お前の存在のどこを見渡しても一部分としてカブってねえよ」

「アハハ、シュウちゃんも結構言うね。んで、なに？」

「……………明日にでも、この村案内してくれるか？」

「シュウちゃん……………！」

「素直に案内を頼まれたのが意外だったのか、それとも単純に嬉しかったのか。火野まあ子は満面の笑みを浮かべながら、言った。」

「『お願いします、まあ子ちゃん』が抜けてないかい？」

「……………ことごとくオレの予測を裏切るヤツだった。」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

第三話 : 摩訶不思議な現象

「ここが学校からシュウちゃんちまでの一番の近道となる裏道さね！ この道を使えば今のシュウちゃんの通学時間をざっと十分は縮められること間違いなしさ！」

「……なんで昨日転校してきたばっかのオレの住んでるトコを知ってたんだ？」

「ふっふっふ。この村のことであっしにわからないことはないのだよ、ジョンソンくん」

「誰がジョンソンだ」

「さあ、ここがこの村きつての大森林、通称『天^{あまの}之森』さ！ 入る毎に内部構造が変わることから不思議ダンジョンとも呼ばれているさ！」

「ついでにモンスターも出てくるとか言わねえだろうな」

「アハハ、さすがにモンスターはいないね。それっぽいのはいるけど」

「いんのかよ」

「この川がこの村をキレイに真つ二つに分ける川さ！ 大昔、思い合う男女がこの川を挟んで別れ別れになったことから、通称『天の川』とか言わねえだろうな」

「おお、シュウちゃんエスパー？ まさか、まあ子の心の中丸見え？ 普段考えていることとかバレバレ？ いやん、エッチ」

「……普段どんなこと考えてんだよお前」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

……疲れた。とにかく疲れた。

ただかた半日歩き回るだけでくたくたになるようなヤワな身体ではなかったつもりだったけど、この身に重くのしかかる重圧の原因の大半は、オレの隣にいる案内人のせいだろう。

一言で言ってしまうえば、とにかく、ウザい。

終始しゃべりまくる。気がつけば身体にからみついてくる。意味不明な行動をしまくる。通りすぎる人全員に「未来のダンナです」なんて妄言吐きまくる。……これをウザいと言わずしてどんな表現を用いれと言うのだろうか。

それでもあまり強くこいつを頭ごなしに否定できないのが、案内する場所が比較的まともだということ。あの不良たちへの対策にしても、普通に生活していくにしても、こいつの案内する場所はどれをとっても今のオレには必要な情報だった。

意味不明な言動行動のワリには筋道が通っている。その矛盾

こそが、こいつがオレの予測外のことばかりする要因なのだろうか。陽が赤く染まりかけた頃になってもしゃべくりまくる火野まあ子のキンキン声から逃れるための現実逃避、または熟考と言う名の精神回復を果たしていた、その時だった。

ズドドドドドオオーン！！

火柱。どこからどう見ても火柱。
この村に着いていきなり見たあの光景と同じものが、民家の屋根から吹き出していた。

「つて言うか、屋根から火柱！？ あれ火事じゃねえのか！？」

「アハハ、立派な火柱だね。ボーボーだ」

「なに観賞してんだよ！ 早いトコ消防署に連絡を　つて、この村消防施設なんてあんのか！？」

「まあまあ落ち着いてよシユウちゃん。アレは火事じゃなくて『魔法』だよ」

慌てふためくオレとは逆に火野まあ子は落ち着いた様子でそう言った。

屋根から吹き出る火柱を、まるで神聖なものでも拝むかのように手を合わせながら見つめてるその姿に、オレの常識はまたしても警鐘を鳴らす。

やっぱり、この村はおかしい。

「シユウちゃんは外から来た人だからわかんないよね。アレは、この村によく起こる自然現象なんすよ。あの吹き出してるものは実際の火じゃないから火事にはなんないのさ」

「……自然、現象？」

「摩訶不思議な現象。それを略して『まじまじ摩象』と昔は呼ばれてたらしいんだけどね、時代の移り変わりと共に呼び名も変わって今じゃ『魔法』って呼ばれてるのさ。見た目は完全にハリポタの世界だしね、まあ子もピッタリの呼び名だっと思うよ」

「こ、この村じゃあんな現象が日常茶飯事で起こってるってのか！？」

「そうだよ。この村が出来た時、三百年くらい前なんだけど、そんな時からこの土地では普通に起こってることだからこの村の住人は

晴れのち曇り、ときどき魔法。

だ〜れも気にしな〜い。むしろ見れたら縁起がいくらいに思ってるね〜」

「……し、信じらんねえ、信じらんねえ！　なんでこんなワケわからんねえ現象をみんなして放っておけんだよ！」

「……シユウちゃん？」

体の奥の奥からどうしようもない衝動が湧き上がる。

予測の力に目覚め始めたあの時と同じ感覚。

もう味わうことはないのと諦めかけていたこの感情。

この現象の謎を解きたい！　この魔法と呼ばれる不可思議な現象についての記録や情報を調べまくって、オレの手でこの謎を解き明かしてみたい！

今この瞬間、眠りかけていたオレの中の好奇心がパツチリと目を覚ました。

「おい、座敷童！」

「誰がクリステイーナ・アギレラだ！」

「言ってねえよ！　今すぐ案内してほしいところがある！」

「ふっふっふ、わかってるべさシユウちゃん。シユウちゃんの目的の場所は実はもうすぐそこにあるんだよ」

「マジかよ！　早く案内してくれ！」

「ほいほ〜い、合点でやんす〜」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

わからないことを調べて、学習して、理解する。それは人間の基本的な欲求の一つだと思う。特にオレは小さい頃からその傾向が強かった。それによって得た知識がオレの予測の力の源。ワケのわからなかったことが少しづつ理解できてくるその快感は、当時のオレにはどんな遊びよりも魅力的なものだった。

予測の力を確信して以来、好奇心はなくなってしまったと思っていた。ほとんどの出来事がオレの予測の範囲内で動くことで、オレは何にも興味を持たなくなってしまうていたんだ。

それが今この瞬間、オレにはまったく理解できないことが二つもある。それは近年のオレからすればかなり喜ばしいことのはずなんだが、それを素直に喜べないのはひとえにこの座敷童の行動がオレのもっとも嫌いな言葉、『矛盾』を含んだものだからだろう。

「じゃーん！　ここがあっしのマイ・スイート・ホームでやんす〜」

「……………は？」

『目的の場所に案内する』　オレの耳が確かならこの座敷童は確かにそう言ったはずだった。それがなぜこいつんちに連れていかれるハメになる？　なんでこんなに得意満面な笑顔でこっちを見る？　とりあえず殴つとく？

「ちなみにあそこがまあ子の部屋の窓だよ。ダンナ、忍び込むならあそこからですぜ、ヘッヘッヘ」

「……………帰る」

「まあまあ遠慮しなさんな。シユウちゃんの目的のものはあっちの蔵の中に入ってるし」

「蔵？」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

ついついこいつの行動のせいで見逃していたが、確かに庭の向こう側に蔵と呼ばれるに相応しいデカくて重圧な建物がズシンと鎮座していた。

周りをよくよく見渡してみると、結構に広い敷地の中にはその土蔵の他にも日本庭園のような池まである始末。オレみたいな無神論者にも一目でわかる神聖な感じの建物まであった。

……こいつって、もしかしていいとこのお嬢様なのか？

「へっへっへっ、ビックリした〜？　うちは土地神様を祭る由緒正しき神社なんすよ！　ちなみにあっしはこの神社の巫女だったりするわけさ！　萌える？　萌える？」

「なるほど、だからおかつぱ頭なのかお前」

「まあそついうわけで、うちの蔵の中にはこの村が出来た頃からの古い文献がてんこもりなわけさ。魔法のこともここならいろいろ調べられると思つよ〜」

「……ッ！」

少し、驚いていた。まさかこいつがこんなにまともな場所に案内してくれるとは。

確かに図書館なんかよりもこの方が古い情報を仕入れるのに適している。今日一日の案内場所の的確さといい、デタラメな奴だと思つてたけど実はこいつって結構まともな奴なんじゃないだろうか。

「シユウちゃん、蔵をあさる前にまずは神主であるじっちゃんにあいさつしなきゃダメだよ〜」

「あ、ああ、そうだな」

「いや〜ん、知り合つたばかりでもう家族にあいさつだなんて、手が早いね〜シユウちゃん！　この分じゃ一週間後にや孕まされてたりして。あひゃひゃひゃひゃひゃ」

「……………」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

高笑いをあげながら、火野まあ子は玄関から家の中へと入っ
てい

く。
この内面オヤジのチビ女のことを一瞬でもまともだと思っ
てしま
った自分に腹を立てながら、オレは進まない気と足を引きずるよう
にして玄関をくぐるのだった。

第四話　：　火野神社の巫女

それから一週間、火野神社に通いつめる日々が続いた。

あの火柱がまだ『摩象』と呼ばれていた時代のことや、この土地に眠る土地神と呼ばれる神を崇めるために建てられたというこの神社の成り立ちが記された文献。火柱や水柱、竜巻や岩が宙に浮くなどの様々な魔法の種類、その発生地点と時期を記した地形図。魔法の種類によつてどんな影響が周りに与えられるか等の記録。

オレの知りたかった情報はこの土蔵の中にこれでもかと言つくり眠っていた。

「……全然わかんねえことだらけだけど、それでも少しづつわかってきたな」

この村の地理を示した地形図の上に点在する『魔法』の発生地点。それを見る限り、そこにはなにかしらの法則があるように思えた。

天気予報や占いしかり、法則があるものには要因が存在し、その要因をつかむことが出来ればある程度の予測もできるし、完全にその法則を把握すればそれはもはや予測どころの話ではなく、支配したと言つても過言ではない。

魔法を支配する者。それは『魔法使い』と呼ばれても遜色のない存在なのではないか？

過去、この神社の宮司だった者はそれに一番近い存在だったそうだ。

それぞれの魔法によつて起こる影響を考えて宮司は村の整地を命

晴れのち曇り、ときどき魔法。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

じたり、農作物の収穫時期を指定したり、村人同士の縁談や子作りの時期まで宮司に相談するものが後を経たなかったとか。今で言うところの風水師や占い師のようなものだった、と。

それくらい、この村にとって魔法は村の繁栄や存続になくてはならない存在だった。この村の魔法を見ると縁起がいいという風習はそういうところからきているのだらう。同時に、今は宮司と呼ばれる存在はいないと言うことでもあるわけだけど。

「とは言え、支配するものが過去にいたんだ。オレなら何かしらの予測もできるかもしれない」

「ふむふむ予測とな。魔法を予測するなんて、なんだかシュウちゃん気象予報士さんみたいだね」

瞬間、心臓が宙に浮いた。

バクバクと暴れまくる心臓の鼓動を悟られないよう、込み上げる怒りを出来る限り殺した表情でいつの間にか真後ろに出現した座敷童を睨みつける。

オレのその表情がそんなにお気に召しやがったのか、なぜか巫女姿の火野まあ子はキャハハと耳につくキンキン声で爆笑していた。

「キャハハハ！ シュウちゃんビックリした？ ベックリした？

それともバツクリした？ いや、真剣に調べものしてるシュウちゃんの顔があまりにもセクシーだったから、気付いたらついつい超接近していたさ。いやん」

「……………」

「おお、シュウちゃん超真顔。わかってるよシュウちゃん、こう言いたいんだね。今日もキレイだねまあ子」

「出て行け」

「え、シュウちゃんひどい！ 一人で遊んでないでまあ子も仲間

に入れてほしいっす〜！」

「遊んでるわけじゃなくて調べ物してんだよ。お前にかまってるヒマなんてねえんだ。いいからどっかに消えろ」

オレのその一言に火野まあ子はピタリと止まった。

ん？ このくらい言葉でキズついたのか？ この座敷童にも少しは心にデリケートな部分があったのか？

「……シュウちゃん、もしかしてそれって……放置プレイってやつ！？ うおお、さすがシュウちゃん、都会から来ただけのことはおんねー！ よっしゃ、まかしちよけシュウちゃん！ 精一杯放置されてやるさー！」

『放置！ 放置！』と謎のかけ声をあげながら、巫女姿の火野まあ子は土蔵から走り去っていった。

……今さらながら確信したな。あいつにデリケートな部分なんてものはない。一切ない。微塵たりともない。もしあったらそうだな、舌を引きちぎって死んでもいいぞ。

まあ、アレはアレで楽しそうだからいいとして、家族はアレでいいんだろうか。我が娘、我が神社の巫女があんなのでいいのか？ 自分の娘があんなだったらオレは世間に顔向けできないけど。

「ま、オレには関係ないことか」

「ふむ、そう無関係でもないかの」

瞬間、心臓が一気にK点を飛び越えた。

この日二度目の背後からの奇襲は意外と精神にきたらしい。今度ばかりは驚愕の表情を殺しきることができなかった。オレの顔面は相当ゆがんでいたことだろう。オレのそんな表情など気にも留めず、

火野まあ子の祖父であり火野神社の神主、火野鷹仁よっしんは言葉を続ける。
……つたく、孫も含めてふざけた名前だ。

「この蔵に通いつめて今日で一週間か。なんとまあ、ずいぶんと魔法に魅せられたようじゃな」

「……アンタら家系の神出鬼没さにもずいぶん驚かされてますけどね」

「ふ、口が悪いの。まあ子が夢中になるわけじゃ」

「なんすかそれ。アイツ、口が悪い男が好きなんすか？ 見かけどおりのヘンタイすね」

「ふあふあふあ、いやいやそういうわけではない。アレはな、今まで誰かに邪険にされたことがないのじゃよ。この村の誰もがアレには一目置いて接しておるでの。お主のように無愛想な扱いをされることがさぞ新鮮なんじゃろなあ」

「あいつが、一目置かれてる？」

「アレはこの神社の巫女だでの、この村においては相当特別扱いされておる。お主も同じ学校に通ってるのなら心当たりはないか？」

「……ああ、そういうことが」

この火野神社に通うようになってからあの不良たちが一切カランでこないのを不審に思っていたが、そういうことだったのか。オレがああの座敷童と何か関わりがあると思われていた、と。

……不愉快なことこの上ねえけど、今はそれよりもまず

「アイツが特別扱いされる理由 もちろん、今オレが調べてることと関係あることなんすよね？」

オレの言葉に、爺さんは厳かに頷いた。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

第五話　：　寵愛を受けし者

「まあ子がこの神社の巫女なのは知っておるな？　もともとこの火野神社には巫女などはおらんかった。かつての宮司がいた時代でも補佐役の女官はおつても巫女と呼ばれる者は存在せんかった」

「巫女がない神社？　……何から何まで規格外っすね、この村は」
「まあ、それも仕方がなかつたんじゃよ。なにしろ、この神社に奉つておる神はいささか寵愛が強すぎての、普通の人間では精神がもたなんだ」

「精神がもたない？」

「巫女とは神に奉仕する者。その身を神に捧げし者。それ故に神の寵愛を賜うことができるのじゃが、土地神様の愛はこの天之恵をまると包んでそれでも余りある程じゃてのう、まともな人間ではその身が持たぬのじゃよ。簡単に壊れてしまつて、それ故に当神社にはこれまで巫女という存在は一切おらんのだ」

ふんふん、その余りある愛が漏れ出たものがあの『魔法』だったことか？　つまり、あの火柱はこの土地の神の愛とやらの残りカスだと。……しようもねえ下世話な話だな。

つまり、火柱や水柱なんかのワケのわからない現象を神様のせいにもしないと村人の騒動を治めきれないと考えた宮司の作り話つてとこかな。神様の愛だ恵みだと謳っている以上、その寵愛を受ける対象である巫女が存在してしまうと辻褃も合わないし政治や統治を行ううえでも何かと都合が悪かつたんだらうな。

各地にまつわる昔話ではよくある裏話……と言いたいところだけど、この土地に関してだけはそういう『よくある話』でくくってしまうのは、少しばかり予断かもな。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「それで、その巫女を持たない神社がなんで今さら巫女を抱えてるんすか？ しかも、よりもよってなんであんなヘンタイなんかを？」

「ふあふあふあ！ ハッキリ言うのうボウズ！ 相当の筋金入りじやのお主、ふあふあふあ！」

「なんすか、性格ひん曲がってるって言いたいんすか」

「いいや。方向性はともかく、お主はまっすぐじゃよ。まっすぐなクセにひん曲がっ取る」

「……そんなハッキリ言われると、さすがにこたえるんすけど」

「ウソをつけ。これっぽっちもこたえとりやせんくせにそう言うところがひん曲がってる証拠じゃ。まったく、まあ子といい勝負じゃな」

ふん。結構わかってんじゃん、この爺さん……って、あいつとい勝負ってどういうことだ？

「お主はアレをヘンタイと言ったな。じゃが、実のところはちと違う。アレは自らをそういう性格だと偽っておるところがあるでな、その辺りがどうにもお主と印象が重なる節があるの」

「……あいつが本当はまともだと？」

その言葉に、爺さんはこくりと頷いた。

おいおい、冗談だろ？ この爺さん完全にボケてるな。そうじゃなかったら相当の爺バカだな。あの女をどう言うふうに見たらまともな人間に見えるって言うんだ？ ありえねえ。

「さっきも言った通り、この神社には巫女は置くことができません。しかし、アレはこうして巫女になっておる。巫女は土地神様の寵愛を受けし者。だからこそ、この村ではアレは特別扱いされておるが、

この神社の巫女である以上はまともな精神でいられるハズがないと、この村の誰もがそう思っており。アレ自身も含めてな」

「なるほど。それであいつは自分がすでに気がふれた変人だと思いついでいるって言いたいんですか？ キンキン声でしゃべくりまくったり、やけにハイテンションではしゃぎ回ったりしてるのは、この神社の巫女に相応しい存在であるための暗示、思い込みの類だと。そう言いたいんですか？」

「さすが似たもの同士じゃの。その通りじゃ」

「やっぱありえねえ。この爺さん、ボケてるわ。」

まずあの女がそういう風に周りに合わせて生きるタチだとは到底思えない。その理由も意味わかんねえし、その必要もねえし、そうする義務を負うこともねえし。

「そしてもう一つ、オレとあいつが似た者同士であるはずがねえ。」

「オレは自分を偽ってる気はねえし、あいつは天然のドヘンタイだし、どこも似てなんかない。似てるはずがねえんだ！」

「……ふ。そんな形相をせんでもよかる。凶星を付かれて否定したくなる気持ちはわかるがの」

「いや全然。凶星どころかてんで的ハズレっすから。あまりにも見当違いすぎて飽きれてるだけです」

「ふあふあふあ。まあ、それでもよかる。む、もう陽が落ちる頃じゃの。せつかくじやから夕飯でも馳走になれ。歓迎するぞ」

「……いえ、もう少し調べ物してから帰ります」
「遠慮するな。お主がおるとアレが喜ぶでの。孫の喜ぶ顔を見るのはジジイの数少ない楽しみじゃよ。蔵あさりの礼だと思って一つ頼まれてくれんかの。……まあ、ひねくれ者のお主は恩など少しも感じておらんのかもしれんかの」

「しわくちやの顔でニタリと不敵に微笑む爺さん。」

……恩返しとか言われたら断りにくいし、それでもムリに断ったりなんかしたら無理やりひねくれ者を演じてるって言うさっきの爺さんの言葉を実証しちまうことになっちまう。

このジジイ、さすがあの座敷童の爺さんだけあるな。とんだ狸ジジイだ。

「……わかりました。別に断る理由もないですしね」

「ふあふあふあ。いやいや、かなりのひねくれ者かと思ったが、多少の恩を感じるまともな青年じゃったとはな。ワシの目もまだまだ節穴だらけじゃな。ふあふあふあ」

残念そうな顔なんか微塵も浮かべることなく、爺さんはスタスタと蔵の出口へ向かっていく。その背中からこの爺さんの思惑など予測できるはずもなく、オレはただただジツと己の敗北を噛み締めるしかなかった。……くそ、見てろよ狸ジジイ。そのうちリベンジしてやっからな。

おもしろくない心中を押さえながら出口へ向かう。外はすでに夜の帳が落ち始めていた。爺さんの思惑にハマって悔しがっていたこの時のオレは、爺さんに肝心の話を読むことをすっかり忘れていたんだ。

なぜ、あいつが火野神社の巫女になる必要があったのか？

オレがその答えを知るのはこの一週間後。あの座敷童が起こした、とんでもない事件に巻き込まれてからのことだった。

第六話 : ボサボサ熱視線

今思えば、今日は朝から何かイヤな予感がしていたんだ。

様々な情報を元にして先のことを予測するのがオレの行動の源。だからもちろんこんな理由も根拠もない予感なんかをアテにするわけもなく、いつも通り学校へとやってきたわけなんだが……。

そういえば予感つてのはそれまでの行動の結果や経験の積み重ねの中から同じような環境、シチュエーションを照らし合わせた時に脳裏をよぎる一種の『予測』だ。人間の行動、経験の情報を膨大に集めて形にしたものが今日の占いにあたるわけなんだから、予感も案外バカにしたもんじゃない。

が、それに気付いたところでもう遅いか。

もうすでに、オレはとても面倒くさいことに巻き込まれてしまっているのだから。

「こおらあああ！ 待てやシュウちゃあああん！！」

凄まじい形相で襲い掛かってくる座敷童。そして後ろを振り返る余裕もなく必死に逃げ回るオレ。

……後ろを見てないんだった表情がわかるわけない？ そんなの見なくてもわかる。あいつは間違いなく、オレをボコボコにするつもりだ。

「止まれやシュウちゃあああん！！ すぐにボッコボコにしてあげるからーッ！」

……どうしてこんな時に限っては予測通りに動くかな、あの女は。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

いつもは全然予測と違う行動ばかりかしゃがるくせに。
って言うか、なんでオレは逃げてるんだ？　なんでこんな真昼間に、なんであんなチビ女に命の危機を感じて逃げ回っているんだ？
そうだ、あの手紙だ。あの手紙が全ての元凶だ。
クソ、あの手紙が届いた時に完全に無視していればよかったんだ。
いつもの通りすぐに火野神社に向かっていればこんなことにはならなかったんだ

その手紙はオレの机の中に入っていた。
ずいぶんと可愛らしいハート柄の模様の封筒、封にはなんかのア
ニメのキャラクターのシールが貼ってあった。
その風体だけでも表情が引きつりそうだったのに、封筒に丸文字
で書いてある文字がさらにオレの表情をピキピキと引きつらせる。

『果たし状。　テヘッ』

果たし状なんてもの、生涯で初めてもらった。　って言うか現物を見る事自体が初めてだ。

こんなバリバリ少女趣味の封筒で、しかも丸文字で、しかも『テヘッ』　なんて書いてある果たし状をもらった奴なんて古今東西このオレしかいないんじゃないだろうか？

それにしても、一体なんなんだコレは？　新手の嫌がらせか？
新種のイジメか？　おもしれえ、このオレをイジメようなんて考えるとはこのどいつ、……って、一人しかいねえな。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

火野神社によく出入りするようになってからオレにからむ奴は誰一人いなくなつた。話しかけてくる奴さえまったくいなくなつてしまつたが、そこは問題じゃない。問題は、そんなオレにイヤつてほどこらんでくる変態がこの村には一人いるつてこと。そしてこの手紙の主が間違ひなくそいつだつてことだ。隣の席にいるはずのそいつの姿が、放課後になつてからどこにも見えないことから、ますますキナ臭せえ。

「……破り捨てるか」

「ま、待て！ 待てつて！」

ポツリと呟いたその瞬間、果たし状を破り捨てようとするオレの手を必死に止める奴が現れた。

あ、こいつ、前にオレにケンカ吹っかけてきたあの不良共の一人じゃねえか。オレに足払われてきれいにスツ転んでたボサボサ眉毛のあいつだ。

「頼むから読むだけ読んでくれよ！ そんでお嬢を助けに来てくれよ！ 頼む！」

泣きながら必死にそう懇願するボサボサ。……オレの方こそ頼むから、そんなに手をしっかり握るのだけは止めてくれ、いやマジで。

「なんだよ、どういう意味だよそれ。つて言うか『お嬢』つて誰だ？」

「……………」
「言わねえと破り捨てんぞ」

「ま、待てよ！ 言う！ 言うから！ ……お嬢つてのは、まあ子さんのことだよ。その手紙はまあ子さんがお前に書いたもんなんだよ」

「やっぱそうか。まったく、相変わらずあの座敷童も意味のわかんねえことするな。」

「読んでみりゃわかるけど、その手紙はオレらがお前に向けて書いた『果たし状』ってことになってんだ。オレらがお嬢を捕まえて人質にしてるから、助けたかったら俺らとタイムン張れ、ってなことになってんだよ。」

心底イヤそうな顔で説明するボサボサ。あいつに言われてしぶしぶこの茶番に付き合ってるって感じたな。

そう言えば、この村では火野神社の巫女は特別扱いされてるってあの狸ジジイが言ってたな。どんなに無茶なことを言われても、巫女であるあいつから命令されたら付き合うしかないってことか。

そういう点で言うと、あいつにチヨップかましたり邪険に扱いまくったりしてるオレって、この村の住人からしたら相当バチ当たり者なんだろうな。自分がこの村の外から来た人間なんだって、初めて実感したな。

まあ、とにかく。

「じゃ、帰るわ。」

「おお、じゃあな　じゃねえよ！　何思いつきり無視してくれてんだよお前！　お嬢を助けに来てくれって頼んでんじゃねえか！」

「悪いけど神社に用事があるだよ。わざわざあいつの茶番劇にのっからなきゃなんねえ理由もねえし、行く必要ねえだろ。」

「必要はねえかもしんねえけど、その、なんだ、ホラ、……そうだ、義理ってモンがあんだろ！」

「……義理？」

「そつだよ！　お前、普段からお嬢に世話になってんだろ！　こんな時くらい恩返ししろよな！」

「世話をかけられたことならたくさんあるけど」

「……なんとなく、って言うか、すげえわかるけど……。と、とにかく来てくれよ！ お前が来なかつたら俺らお嬢にどんな目に合わされるかわかつたもんじゃねえんだよ、マジで頼む！」

「まったく、都合のいいヤローだな。人を呼び出してボコろうとしてやがったくせに、自分の立場が悪くなると途端に手のひら返しやがって。……って言うか、早いところその手を離せ、手を。」

「頼む、頼む中津！ お前が付き合ってくれらるまで離さねえからな！」

「手を握ったままそういうこと言うな。誤解されんだろうが」

「誤解なんかじゃねえよ！ 俺はマジで言ってるんだよ！」

「いや、だからその言い方やめろ」

「中津くっ！ 頼む、一度つきりでもいいから！」

「だから手を握って熱い視線で見つめたままそういうことを言うな
ってんだよ！ こいつ、マジでその気があるんじゃないか？ な
んか手が湿ってたんだけど。」

「クラスメイト中のいかがわしげな視線と、目の前のボサボサのう
つとおしい熱視線が突き刺さる。その二つの視線から逃れる一番て
つとり早い方法と言えば。」

「……わかったよ。あいつを助けに行けばいいんだろ」

「こうしてオレはあの座敷童の茶番に付き合うことになったんだけど。
その選択こそが最大の間違いだったことに気付くのは、これか
ら一時間後のことだった。」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

第七話　：　鬼ごっこの始まり

放課後、男二人で廊下を歩く。ボサボサ眉毛が先導しながら、あの座敷童が待つ林の中を指す。

なんでもその林の中にはちょっとした広い空間があり、不良たちがそこでオレをボコるために待ち伏せしているらしい。もしもオレが反撃しそうになると、人質であるあのチビ女を使って無抵抗にする。その逆境をも乗り越えて人質を救うオレ。そしてヒロインであるあのチビ女はオレの胸に飛び込んできて、そして二人は手を取り合って、夕日に向かってハッピーエンド。

これがあのヘンタイの考えた今回のシナリオらしい。……完璧に、茶番だな。

このシナリオにノリノリなのはあの座敷童一人だけ。不良たちはあいつにしぶしぶ付き合ってたやっただけ。このオレにしたってあいつを助ける気なんか一欠けらもねえし。

それにしても、一つ疑問が残る。なんでこいつらはそうまでしてあいつの言うことを聞かなくちゃいけないんだろ？　いくら特別扱いされてるって言っても、今回は完全にあいつのワガママだろ。ムリに付き合わされる道理なんかないはずなのに。

その疑問をボサボサにぶつけてみたところ、意外な返事が返ってきた。

「お嬢に逆らったりなんかしたら後が怖いんだよ。家族からバチ当たりモン呼ばわりされたり、隣近所から白い目で見られたりよ」

「不良のクセにそんなモンが怖いのかよ」

「うるせえな、狭い村には狭い村なりの生き方ってのがあんだよ！

よそから来たお前にはわかんねえだろうけどよ！」

「なるほど。それもそうかもな」

「……でも、それだけなら俺らだつて別に怖かねえんだよ。俺らにとつてお嬢に逆らうことで一番怖いのは　魔法だよ」

言いながらボサボサは青白い顔を浮かべた。思い出したくないことでも思い出しているかのように、足元を見つめては「うう……」とうめき声をあげていた。

この村で魔法と言えば、オレが今調べているあの魔法のことで合ってるよな。

土地神の愛の結晶。もしくはその残りカス。この村にとって、魔法は村の繁栄のためになくてはならないもの。だからこそ、村人にとって魔法は崇める対象であるはず。

それなのに、なんでこいつはその魔法が怖いなんて言うんだ？魔法とあのチビ女が何か関係あるって言うのか？

「俺、昔一度だけお嬢を怒らせたことあんだけどよ。そんな時に怖ろしい目に遭わされたんだ」

「刃物で切りつけられたとか？」

「……リアルに怖ろしいこと考えるな、お前」

ボサボサの眉間にシワが寄る。

ボサボサ眉毛とシワの合体。しかめ面のつもりなのか。それともオレを笑わせるつもりなのか。

眉とシワを一体化させたまま、ボサボサは続ける。

「そついうのとは違う種類の恐怖なんだよな。……お前、この村に来て魔法は見たことあるか？」

「ああ、デカイ火柱を二度見たかな」

「火柱あッ！？　お前、火柱見たのか！？」

しかめ面から目を大きく見開いた驚愕の表情へと変化し、ボサボ

晴れのち曇り、ときどき魔法。

サ眉毛はシワと言う名の鎖から解き放たれ、まるで飛び立つ鳥の翼のようにキレイな弧を描いた。

……ヤバイ、頬がピクピクしゃがる。表情に出てしまいそうだ。こいつ、なんてオレのツボにはまる攻撃してきやがんだ。これでさらにいろんな変化させられたら、もう、もたねえ。

「……マジかよ。俺、火柱の魔法なんて一度も見たことねえ。魔法の中でもかなりのレアもんだぞ。いいなあ、お前」

感心したような、羨ましそうな表情。

そして肝心の眉毛は、カタカナの「ハ」の字へと変化していた。

「ブフツ！」

「うわ、汚ねえ！ てめえ、ツバ飛ばしてんじゃねえよ！」

「……いや、かなりの破壊力だったんで、つい……ぐ、ぐ……！」

「?? ああ、火柱のことか。そうだよな、聞いた話じゃすげえ勢いで燃え盛ってるとか言うもんな。ってか、なんで泣いてんだお前？」

……やべえ。腹痛すぎて、しゃべれねえ……。

くそ、予測通りのネタだったって言うのにこんなに腹にくるなんて……。おそるべし、ボサボサ。

「んで、その魔法なんだけだよ。他にも岩が浮いたりブツ飛ばされるくらいの突風が吹いたりとかあんだけどよ、……お嬢は、その全部を操れんだよ」

「は？」

腹痛が一瞬で消し飛んだ。自分の思考が急激に深くなっているのがわかる。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

今こいつ、なんて言った？ 魔法を操れる？ あいつが？ あの
ちんちくりんが？

……ありえねえ。

「おいおい、笑えない冗談だな」

「冗談なんかじゃねえよ！ 被害に遭った奴は俺以外にもたくさん
いるし、お前が火柱なんてレアな魔法見たのもお嬢と一緒に居たか
らに決まってるんだよ！」

「そんなのただの偶然だろ」

「それだけじゃねえ！ 今年の初め頃にお嬢が風に乗って空を歩い
てる姿だつて俺はこの目で見てんだよ！ 人型の凧かと思つてたら
お嬢だつたんだ、すげえビビツたぞ！ それに 、これ

」

ボサボサの音が、鼻息と共にだんだん荒くなっていく。それと同
時に、オレの思考は段々とクリアになっていく。

熟考の前触れ。深い思考に陥るための儀式。

思考の海へ潜っていく。深く、暗く、静かな深海。

目の前にいるはずのボサボサの顔も、声も、オレの中から消えて
いった。

さあ、考える。

ボサボサのあの必死さにこの表情。ウソを言っているような顔に
は見えない。

しかし、それだと話がおかしくなってくる。アイツが魔法を操れ
る？ それはどうにも信じ難い。

もしそうだったとしたら、アイツと一緒に火柱を見た時のあの反
応はどうなんだ？ アイツは両手を合わせて火柱を拜んでいた。ア
レは、その火柱自体を操っている奴の反応にしては不自然ではない

のか？ ……いや、あの行動自体が魔法を操るための動きだった
ら？

……ムダだな。ここらへんは予断の域を出ないところ。考えても
ムダだ。もつと建設的に、別の土台を組み立てて考えてみよう。

ボサボサの証言が真実だとしたなら、まずその目で確認したとい
う『風に乗って歩いている』というものが一番真実味がある。それ
以外の証言はあくまでボサボサの仮説にすぎない。

火野神社の蔵にあった文献には魔法の種類とその意味、もたらす
恩恵、災害が記載されていた。ひと一人を宙に浮かす魔法も記録さ
れていて、『風雲』^{かまくも}という魔法がそれだ。

その『風雲』の上で、あのチビ女はバランスを取りながら歩いて
いたってのか？ ひと一人を宙に浮かすほどの突風の中で、そんな
ことが可能なのか？

……待てよ、あの女には他人と違うアドバンテージがある。火野
神社の巫女であることだ。あのジジイの言う通り、魔法が土地神の
愛の結晶だとするなら、同じく土地神の寵愛を受ける対象である巫
女には、魔法を操る力が与えられていてもおかしくはないんじや
、

……いや、違っただろ、違っ違う！ そうだとしたらやっぱりおか
しい！

もしそうだとしたら、かつて魔法を支配していた宮司の存在はど
うなる？ 巫女が魔法を操れる存在だとしたら、魔法を支配してい
たのは宮司ではなく巫女のはずだ。あの神社ではつい最近まで巫女
は存在していなかったんだ。村をまとめる宮司にとって、魔法を意
のままに操れる都合のいい存在である巫女をそばに置かないなんて
ことはありえない！

それともまさか、文献は真実を記していないのか？ 何かを隠す
ためにウソを記してあるのか？ それともこの仮説の前提が間違っ
ているのか？ 巫女と魔法は何も関係がないのか？

それとも

「。ツ！ おい！ 中津！」

その声が聴こえた瞬間、視界に光が飛び込んできた気がした。暗い海の底から一瞬で海上に浮上した魚の気分。熟考から思考を解放した時のいつもの気分だ。

「ああ、悪い。つつい熟考しちゃった」

「なんだそりゃ？ お前、この間のケンカの時もいきなり今みたいにボツとしてたよな。もう少しで着くからしっかりしてくれよな」
「……ああ、わかった」

オレの返事のキレの悪さに不安なのか、ボサボサの眉間にシワがよる。さっきまでオレの腹に大打撃を与えていたその動きも、今のオレには効果はない。

さっきまでの熟考で浮いてきたいくつかの仮説。どれも検証するには充分すぎるくらい価値を持っている。あくまでボサボサの証言から浮かび上がった仮説だが、こういう情報はいくらあっても足りないほどだ。あればあるほどいい。

そうだ。オレにはまだまだ、情報が足りない。

蔵の中の文献だってまだ全部読んだわけじゃないし、もしかしたらこの村にいる住人にだって文献以上の情報を持っている人がいるかもしれない。

……よし、決めた。こんな茶番に付き合ってるムダな時間なんて、オレにはない。

「おし、着いたぞ中津。俺は先に行って他の奴らと合流するから、お前はもうちょっとしたら来いよ。っていうか、逃げんじゃねえぞ」

「……」
「おい、聞いてんのかよ？」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「ああ、わかってる。オレもあのチビ女にちょうど言うことができ
たし」

「チビ女って……。ま、まあお前はお嬢に気に入られてるから平気
だろうけどな」

熟考で気が付かなかったけど、いつの間にかオレたちは林の入り
口に立っていた。

木々に囲まれ、林の中は薄暗い。放課後とは言ってもまだまだ夏
だけに陽は高いはずなのに。

そんな中で、光の差し具合がまるで違う一点があった。木々が開
かれ、平原と呼ぶには少し狭いが、何人かで過ごす分には充分すぎ
るほどのスペース。

「も〜ッ！ シュウちゃんはまだ来ないんか〜い！」

聞き覚えのあるキンキン声が聴こえてくる。間違いないな。あの
場所に、あのチビ女がいる。

ボサボサが先に広場へ。仲間に何かを伝えているようだ。オレを
連れてきたことでも伝えてるんだろう。

少し間を置いて、オレも広場へ向かう。

「あ〜〜！ 来た来た来た！ お〜い、シュウちゃ〜ん！」

オレの姿を見つけ、ブンブンと手を振りながらチビ女が叫ぶ。…
…って言うか、お前は一応捕まってる設定なんだから。その目の前の
お菓子の山とランプはなんだ。くつろぎすぎだろ。

「きゃ〜ん。シュウちゃん、あつし捕まっちゃったさ〜。早くたっ
けて〜、ポパ〜イ」

「誰がポパイだ」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「よお中津。一人でよく来たな。って言うかよく来てくれたな。ホント助かった。恩に着る」

「お前らも大変だな、敵役ごころうさん」

「シユウちゃん、こいつら早くぶっ飛ばして〜！ 捕われの美少女を早いとこ救い出せコラ〜！」

この場にいる全員がバレバレだと気付いていると言つのに、まだ続けるかアイツは。

……しょうがない。不良どもには悪いが、さっさと終わらせてしまおう。

「そんじゃ早速やるか。覚悟はいいよな、中津」

「あゝ、その前に一つ言いたいことがあるんだけど。いいか？」

「??? なんだ？」

スウツと息を吸う。皆の注目が集まるのがわかる。あのやかましいチビ女でさえ、オレの言葉を黙って待っている。あの嬉々とした表情は、オレが何かかっこいいセリフでも言うのかと期待でもしてるんだろうな。

出来るだけ響くように。出来るだけ無感情に。あのチビ女の驚く顔を思い浮かべながら。 。

数秒の間をあけて、口を開く。

「茶番は終わりだ。悪いけど、こんなのにいちいち付き合ってる時間がねえんだ。じゃあな」

言い切つて、背を向ける。

背後からは何の音も聴こえない。絶句でもしてるんだろうか。好都合だ。あいつらが驚いているこの隙にとっと帰ってしまおう。

「……どんな……」

背後からポツリと、何かが聴こえた。そう思った瞬間だった。

「一体どんなツンデレじゃーい！」

ドスの効いた声が林の中にこだまする。

その声の主が誰か、オレが理解するまでの時間はそうは長くなかったはず。一瞬と言ってもいいはずだ。

しかし、それでもその間は長かつたらしい。

オレが振り向いた時にはすでに、先ほどまでの温和な空気はなくなっていたんだから。

「な……！」

十人近くは居たはずの不良たちのほぼ半数が、その場でうずくまっていた。

……一体何が起こった？ オレが背中を向けていたほんのわずかの間に、こいつらに何が起こったんだ？

うずくまった奴らは呻きながら地面をのた打ち回っている。残った奴らは皆一様に怯えた瞳で、この空気を作り上げた人間を見つめていた。

そいつこそがさっきの怒声の主。この場にオレを呼びつけた張本人。ヘンタイ女、火野まあ子だった。

「放置プレイは良し！ プレイだからね！ 悪口も良し！ 愛着こもってるって感じるからね！」

皆の視線を集めたまま何やら意味不明な口上を始める座敷童。つか、言ってることがワケわかんねえ。一体何が言いたいんだ？

「でも思わせぶりにもならない冷たい態度はいかんとですよー！
助けに来といてあっさり帰るとな！？ 一体どんなツンデレ！？
ふにゃ〜！」

妙な奇声を発しながら、火野まあ子は飛び蹴りを繰り返す。

二、三步の歩みを経ての飛び蹴り。それがどれだけの勢いを生むか、どれだけの威力なのかは想像に難くない。

しかし、火野まあ子のそれは違った。

あの小さな身体のどこにその動きを作り出す原動力があるのだろうか。初めの一步からして並じゃなかった。残像を残すほどの、鋭すぎる一步目。

その勢いをさらに加速させる二歩目、 地を跳ねる三步目、
そしてその先には、ボサボサ。

「うぎゃッ！」

火野まあ子の鋭い飛び蹴りがボサボサの腹部にクリーンヒット。
まるでアクション映画のようにボサボサの身体が土煙をあげながら地面を転がっていく。

オレはその瞬間まで、この世の中は物理法則にのっとったものだと思っていた。質量の重い物はそれだけでエネルギーを持ち、一度動き出せばさらにエネルギーを生み出す。つまりは、重ければ重いほど、速ければ速いほどに『力』は増す。あのチビ女の体格から生み出される力なんて、たかが知れたものはずなんだ。

それなのに、この光景はどういうことだ？

ここにいるメンツの中で一番小さい、しかも女に、不良と呼ばれるからにはいくらかケンカにも慣れてるだろう連中が、あっさりと叩きのめされている。

……ったく、この女は。どこまでオレの『予測』の範囲を外れり

や気が済むんだ。

「シュウちゃん！」

あ、ヤバイ。白羽の矢がこっちに立ちやがった。

「……行儀の悪い子にはしつけを。マナーのなっていない輩には制裁を。ツンデレシュウちゃんには、愛の鉄拳を！」

「いや、遠慮しときます」

「あひゃひゃひゃ。……遠慮できる立場がコンチクショー！」

来た！ 来やがった！

先ほどの飛び蹴りの時と同じように、鋭い初歩でこちらに向かってくる火野まあ子。その勢いはまさに電光石火。稲妻のような鋭さと俊敏さだった。

だがこれは予測できた。タイミングも方向も、その鋭さも。

勢いが鋭い分だけ方向はしばらくは良くなる。良くも悪くも直進的。だがそれ故に予測されやすい。このオレが相手なら、なおさらだ。

「もーっ！ ちょこまか逃げんなコレー！ うがー！」

情報収集が趣味、この村に来てからほとんどの時間を火野神社の蔵で文献読むのに過ごしていたこのオレにだって人並の体力はある。……だが、あんなヘンタイにそのまま付き合ってたんじゃすぐに底をついちまう。

三十六計、逃げるが勝ちだ。

「あー！ ころく、待たんかーい！ シュウちゃんのくせに逃げるかー！」

「お前こそ座敷童みたいなナリして人様に害を為してんじゃねー！」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「誰がチャン・ツイーだ〜！」
「言ってるねーよ〜！」

逃げる側と追う側。 狩る側と狩られる側。 命がけの鬼ごっこは、
こっして始まった。

第八話　：　道しるべの『魔法』

「こおらあああ！　待てやシユウちゃんあああん！！」

背後からの怒声で我に帰る。結構長い間こうなっていたいきさつを思い出していたようだ。こんな状況で思いに耽るなんて我ながらのんきと言うか怖いもの知らずと言うか。

いつものキンキン声とは違うドスの効いた声で叫びながらオレを捕まえようと激走してくる火野まあ子。一步でも躊躇していたらすぐに間合いを詰められてしまう。あの全然関係のない不良どもでさえ一撃でのされたんだ。怒らせた張本人であるオレなんかどんな目に遭わされるか、想像もつかねえ。

不良たちのたまり場だった広場を抜け出し、とにかく林に沿って逃げまくる。村道なんてほとんどが田んぼや畑の間にある直線だらけ。捕まえてくださいって言ってるようなものだ。

ここは曲がりくねっている道を選ぶのが得策。何かと障害物のある道だとさらに良し。直線なら圧倒的に有利なあいつのスピードも、こうも木の枝や藪、坂道と言った障害物があると不利に働く。さらにはジグザグに逃げまくるオレの遁走に、さすがの座敷童も簡単には追いつけずにまいつているようだ。

「あゝ、もう！　シユウちゃんは特別に優しく殺してあげるからとっとと止まりんしゃい！」

「そんな魅惑的なセリフ、このシチュエーションで全然意味ねえ！」

「ほらほらシユウちゃんシユウちゃん！　あつし今マツパだよ！」

木の枝が引つかかかって服がビリビリ状態さ！　セクシーまあ子ちゃんが真後ろにいるよ！　振り向かないと損つすよ！

「そんな未発育な身体になんか興味ねえ！」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「あー！ カッチーンきたー！　せめて発展途上つて言えー！」
「同じ意味だろ！」

「まだ未来に希望があるでしょーが！」

「今は絶望的ってことじゃねえか！」

「うわー、カッチーンきたー！」

うわ、スピードが増しやがった。迂闊なことは言わない方が身のためだな。

ジグザグに逃げながら、頭の中に村の地図を描く。学校近くの林を迂回したこの道筋の先に何があるか、どの場所にたどり着けるか、トレースする。

「……よし、いける。方角さえ間違えなければあと数分で着くはず」

オレの目指す目的地。逃亡先として選んだそこは、火野神社。オレを追ってきている火野まあ子の実家だ。

この村の住人は火野神社の巫女であるあの座敷童の味方をしかねない。つまり、村の中はどこをとってもオレにとっては危険地帯。しかし、唯一の治外法権と言つていい場所こそがあの神社だ。

火野鷹仁。あの爺さんなら、きっと火野まあ子の奇行を止められるはず。

あいつが自分の祖父をもぶつ飛ばしてしまう可能性もなくはないが、まあその時はその時。オレがボコボコにされるよりはまだマシだろう。

そんなろくでもないことを考えながら、ふと気付く。先ほどまで付かず離れずだった火野まあ子との距離が少しづつ開いてきていた。

「チャンス、だな」

まさかあの女を引き離せるとは思ってなかった。こんな見通しが

晴れのち曇り、ときどき魔法。

利かない場所で距離が開いたなら、身を隠すチャンスだ。うまくいけば神社に逃げ込む前にあの女を撒けるかもしれない。

山道はずれ、木陰にまぎれる。荒れた息を整えつつ、やってくる追跡者を待つ。こんな時にあの響くキンキン声は役に立つな。

「うらゝ！ ……あれ？ シュウちゃん？ おゝい、シュウちゃん？」

ち、止まりやがった。そのまま走って突っ切っていけばいいのに。さすがヘンタイ、嗅覚が鋭い。

オレが隠れている木と山道にいる火野まあ子との距離、およそ二十メートル。そこまで近くはないが、少しでも動けば音が聴こえる距離だ。ここはしばらくガマンしてでもあいつが動き出すのを待つしかない。

むゝ、と唸りながら辺りをキョロキョロ見回す火野まあ子。唇をとんがらせて明らかに不満顔。相当イライラしてるな。

「あゝ、もう！ シュウちゃんどこさゝ！ 返事しろゝ！」

するかバカ、 そう思った瞬間だった。

火野まあ子の近くにある石が、……いや、石なんてモンじゃない。岩と呼んでもいいくらいの大きめの石が、ふわりと宙に浮いた。

「ッ！」

思わず漏れそうになる声を手で塞ぐ。

あれは、魔法か？ 岩が宙に浮く魔法、『浮石』^{ひせき}と呼ばれるものだ。火柱以外の魔法なんて初めて見た。……いや、そんなことはどうでもいい。考えるべきは一つ。なぜこのタイミングで魔法が発動したのか、だ。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

『お嬢は、全部の魔法を操れんだよ』

ボサボサの言葉が脳裏に浮かぶ。

まさか……、あの魔法はあいつが発動させたのか？ そうとしか
思えねえ。だって、文献に記されていた、あの魔法の恩恵は、

ブワッ！

ズドンッ！

『浮石』が猛スピードで動き出す。

小さな枝や蔦など、その速さと硬さの前には存在の意味を為さず
に無残に散る。まるで弾丸のようなその魔法は、オレの背後にある
木に宿る太い枝を軽々と貫いた。

派手な音を立てながら崩れ落ちる枝。それは火野まあ子の注意を
引くには、充分すぎるほどだった。

「そこさねーッ！」

獲物を見つけた猛獣の如く襲い掛かってくる火野まあ子。その目
をまっすぐにこちらを向いている。

「クソッ！」

その言葉が鬼ごっここの再開の合図。

踏み固められた山道とは違う荒れた山肌を駆け上る。土に足がめ
り込み、まるで足かせのように靴にこびりついていく。火野まあ子
も同じことを思っていたのか、背後からキンキン声で悪態が響いて
くる。

「あゝ、もう！　なんでこんな道に逃げるかなコレ〜！」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「だったら追ってこなけりゃいいだろがよ！」

「いんや！ これは試練さ！ シュウちゃんに追いつけるかどうか、土地神様があっしの愛を試してるわけさ〜！」

「昨今の犯罪者がよく口にするような戯言ぬかしてんじゃねえ！」

『試練！ 試練！』と掛け声をあげながら迫ってくる火野まあ子。ここにきてテンションが上がってしまったようだ。くそ、ヘンタイはこれだからタチが悪い。

そんなハイテンションのヘンタイ女をよそに、オレは足場の悪さに四苦八苦しなから先ほどの魔法を思い出していた。

岩や石が宙に浮いて移動する魔法『浮石』。その恩恵とは、

『行くべき道を指し示す道しるべ』

まさにあの状況にうってつけの魔法。しかも、明らかに火野まあ子にオレの居場所を示すように『浮石』は発動した。

まさか、本当に、アイツは……。

「うら〜！ シュウちゃん、覚悟はできたかコレ〜！」

オレの思惑をよそに、オレと火野まあ子は荒れた山肌を登っていき。

夕日の赤色が木漏れ日となって、山肌は燃えるようにうねる。

太陽はもうすぐ海の彼方に沈もうとしていた。

第九話　：　形勢逆転の一撃

うるせえ。うるせえよ。

脳にダイレクトで突き刺さる音がある。やかましい程身体中に鳴り響く音がある。

一つは心臓の音。あの不良たちのたまり場からここまでほぼノンストップで疾走してきたんだ。距離なんていちいち計ってねえけど、おそらくは数キロは走ったはずだ。しかも全力で。そうでもしなきゃ、あの女から逃げられない。

そしてもう一つ。背後から轟く、座敷童のキンキン声。

「シュウちゃんシュウちゃんシュウちゃ〜ん！　いいかげん止まりんさ〜い！」

「はあ、はあ、……っはあ、はあ」

「返事せんねー！　さびしかとやるー！」

「はあ、はあ、……うっせえよチビ。……はあ、はあ」

なんでもあの女はまだあんなに元気なんだ。こっちはもう倒れる寸前だつてのに、ちよつとは疲れてる様子の一欠けらでも見せろつてんだ。

さらに進路は最悪。急勾配の上り坂。加えて踏みしめる足を飲み込む柔らかい土のせいで体力はどんどん奪われるし、逃げ込もうと思っていた火野神社はどの方角か全然わからなくなつちまつたし。

……くそ、手詰まりか。

「あ、シュウちゃんそっち行っちゃダメっすよー！」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

背後からのその声に、少し違和感を感じた。

口調は先ほどまでと同じふざけた口調だった。だけど何かが違う。何か焦りのようなものが、その言葉には混じっていたように思えた。チラツと背後を見るとオレを追ってくる座敷童。その姿を見た瞬間、オレは違和感の正体を悟った。

あいつ、オレと距離を縮めようとしていない。わざと距離を保つてやがる。

なぜだ？ あいつはオレをボコボコにするために追ってきてるんじゃないのか？ オレを捕まえて、あの不良たちと同じように叩きのめすつもりなんじゃないのか？

……わからない。あいつの考えがわからない。

圧倒的に情報が足りないんだ。魔法のことにしても、この村のことにしても、あのチビ女のことにしても。

……いや、違うな。情報ならここに来てからの数日間である程度は足りているはずなんだ。それでもあの女の行動の意味が掴めないのは、単純にオレの予測の力が未熟なせいだ。

……許せねえ。

自分の知識の無さが、視野の狭さが、凝り固まった概念が許せねえ。

だったら、そんなものブチ壊してしまえばいい。

世界の幅を広げるにはどうすればいい？ 見えないところを見よ
うとするにはどうすればいい？

答えは簡単、世界や視野を遮っている障害を取り除けばいい。

そして今、この状況におけるオレの予測を遮る障害とは何か？
ブチ壊すべき壁はどこにある？

「そうそう！ そのまま真っ直ぐ行っ たんさーい！」

脳にダイレクトに伝わってくるように、その声は響いてきた。

……そうか。そうだな。やっぱりお前しかいねえな。

この場で一番オレの身近にいるオレの予測を超える存在、壁の向こうにいる存在っていやあ、お前しかいないよな。

熟考に浸る時と同じように、頭の中がクリアになる。

やるべきことがハッキリすれば、あとはそれを為すために最善の手を導き出すだけ。

「ん〜？ あれあれあれ〜？ どしたのシュウちゃん、もう疲れたんかい？」

キンキン声がかんたん近づいてくる。当然だ。オレはもうすでに走るのをやめたんだから。

呼吸の音と心臓の音がうるさい。思考をクリアにするためには、それらは邪魔にしなければならない。

上体を曲げて膝に手をつきながら、目を閉じて息を整える。そして深呼吸。息を整えるため、それ以上に深く思考の海に潜るために。

さあ、考える。

「う〜ん、シュウちゃんって思ったより体力ないね。もうちょっと逃げてくれるかと思ったのにさ。あ、それともそれとも！ わざと止まったんかい？ 『ふ、まあ子、お前の情熱には負けたよ』とか言って二人は夕焼けの光を浴びながら抱き合っかい？ ひゃー！ テレちゃうさ、テレちゃうさー でも半殺しにはするけど」

「……そうだな。やっぱりそれしかねえよな」

「え？」

オレの言葉を聞いて驚いたのか、チビ女の言葉が一瞬止まったのがわかった。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「え、え？ シュウちゃん、本気の本気でその気だったんかい？
い、いやあ、なんか、そうやって素直に認められるとそれはそれで
味気ないと言うか、呆気ないと言うか、本気でテレるものさね」
でも半殺しにはするけど」

チビ女の声がすぐ隣から聴こえる。
キンキンとした声のおかげで、目を閉じていてもわかる。チビ女
の位置も距離も、その距離がオレのやろうとしていることに最も適
した距離であることも。

さあ、決行だ。

「ッ！ シュウちゃん！」

次の瞬間、オレは身体を支えていた膝をガクンと崩した。

自然、それを支えにしていた身体も同時に崩れ落ちる。傍目には
オレが今から地面に倒れ落ちるように見えるだろう。横で見ている
チビ女から、オレを支えようと手を伸ばしてきた感覚がした。

同時に、チビ女のいる側からはオレの身体で死角となっているそ
の場所で、オレは拳を固めていた。

目的は一つ。壁を打ち崩すこと、その一点のみ。

チビ女の手がオレの身体に触れた瞬間、目を開いた。瞳に、目的
の箇所が飛び込んでくる。想像通りのベストポジションだ。

さあ、壁をブチ破れ！

「ッラァ！」

「！！！」

崩れ落ちた膝は、勢いを溜め込み爆発させるための火薬。
開いた瞳は、目標を一瞬で見定めるためのスコープ。
握った拳は、目標へ向けてまっすぐに貫く弾丸。

そうして放たれたそれは、目標　火野まあ子のアゴへ向けて一
直線に進んでいく、はずだった。

ゴスツ！

「あきや！」

「あ」

入った。モロに入った。

オレの拳はまっすぐに、火野まあ子の左頬へと吸い込まれた。
軽々と吹っ飛んでいく火野まあ子を見つめながら、自分の膝を見
つめる。思いの外疲労が溜まっていたらしい。ここまでの全力疾走
がたたったんだろう、膝が曲がったまま延びきっていなかった。そ
の結果がこれだ。

モロに顔面にパンチをくらったチビ女は吹っ飛んで倒れたままビ
クともしない。その姿に、さすがに罪悪感が湧いてきてしまった。
いくらオレだって女子供（あの女の場合どちらとも言える）の顔
面を殴ることはさすがに抵抗はある。アゴの先端を強く鋭く打ち
抜くと脳震盪を起こすと言っし、あの体力バカを一発でおとなしく
させるにしても一番いい方法だと思ってたんだが。……失敗したな。

「おい、座敷童」

近づく前に声をかける。こいつのことだから気絶してるフリでも
してんじゃねえだろうか。いつもなら「誰がミーシャバートンだー
！」とか言いながら返事しそうなもんだが、今回は何の反応も返っ
てはこなかった。

……本気で気絶してんのか？　まさか死んじやいねえよな？　…
…いや、心配するだけ損だな。この女はいつだって、オレの予測の
斜め上でキヤツキヤと遊びまくってんだから。

しばらくジューツと見つめてみると、チビ女の指先がピクツと動いた。

「あゝもう！　なんで抱き上げてくんないかな〜！　かわいい女の子が気絶してるとこと言えば、健全な男子なら介抱するか、お持ち帰りするか、胸をチョイって触るかのこれからの人生を左右する思春期のギアチェンジの場面っしょうが！」

「……やっぱり気絶してるフリだったか」

左頬を真つ赤にしたまま意気揚々と立ち上がるチビ女。しかし、足元がフラフラしていることから結構ダメージはあるようだ。ちよつと失敗しちまつたけど、おとなしくさせるって言う当初の目的は果たせたかな。

今ならあのワケのわかんねえスピードも出せないだろう。あの爆発力がないのならもはやただのチビ女、ねじ伏せるのなんか造作もねえ。

……ただ、まだ問題が一つだけ残ってんだけどな。

「うわ、鼻血出てる！　流血だ！　鼻血ブーだよ！　シユウちゃん、あつし、今はまあ子じゃなくてブー子だよ！　あひゃひゃひゃ、ブー子、ブー子！」

何が楽しいのか、チビ女はフラフラした足取りのままはしゃぎまわっている。自分の血で興奮してるんだろうか。世の中には血を見るとそうなる人種がいると聞いたことがある。野生の本性がどうか変態的な理由でどうかだったと思うが、あのチビ女の場合どちらにも当てはまりそうで夕チが悪い。

さてそんなことはさておき、

「とりあえず訊かせてもらおうか。お前の目的はなんだ？　なんで

オレをこんなとこまで追ってきたんだ？」

相変わらずフラフラ動く座敷童に距離を置いたまま問いかける。いくら足にきてる動作だっていつてもこの女のことだ、いきなり飛びかかってこないとも限らない。こいつに関してだけは用心しすぎて足りないと考えていた方がいいだろう。

真っ赤になつた左頬をさすりながら、火野まあ子は答えた。

「目的？ え〜っと、逃げるシュウちゃんを取っ捕まえて、半殺しにして、夕日に向かってハグ……あれ？ ハグした後に半殺しだけ？」

「ごまかすな」

ハッキリと言ってやる。

半殺しだボコボコにするなんて言うのはデタラメだって、さすがにもう気付いていることだ。こいつがそのつもりなら、もうとっくにオレはあの不良たちと同じようにボコボコのまま横たわっているはずなんだから。

なのに、こいつはそれをしなかった。わざと距離を詰めずに一定の距離を保つようにしていたのは、何か他に目的があるからだ。さつきオレを見失ったのは、距離の加減を間違えたせいだろう。

そのことを伝えてやると、座敷童は罰が悪そうにひきつりながら笑った。そして、逃げた。鼻血を流したままで。

「誰が教えるかバカ！ うきー！」

サルのような奇声をあげながら、ピョンピョンと山奥へと跳ねて逃げていくチビ女。ただ、さすがにダメージが残っているのがフラフラとよろけている様子からもわかる。

あの様子なら追いかければすぐに捕まえることはできそうだけど

……、そこまでして無理に訊き出す必要はあるのかって思いもなくはない。大体、オレには用事があるってのにここまで付き合ってたんだ。あのチビ女の目的は皆目見当もつかねえが、もう充分すぎるくらいあの女と関わってやったつもりだ。追いかけてこないのなら、このまま火野神社に向かってもいいだろう。

が、しかし。

オレはどうにもやはり、イジメっ子の気性の持ち主らしい。

さっきまでオレを執拗に追っていたあのチビ女が、今はそそくさと逃げる立場になっているということも相成り、オレの気性を疼かせる。

狩られていた側が狩る側になる快感。

オレの中で、理性が呟く言葉よりもその快感の方が勝ってしまうのだからしょうがない。それに、ここで一度あの女をシメておいて力関係をハッキリしておくのも今後のためになるかもしれない、なんて言うのは少し言い訳っぽく聞こえるが。

……そしてもう一つ、あのチビ女に問いたださなければならぬことがあるのも確かだ。

「まったく、なんでオレがあのかんたいを追っかけなきゃなんねえんだか」

憎まれ口にして、オレの足取りは軽い。顔もこころなしに綻んでいる気がする。

さあ、覚悟しやがれ、チビ女。

「もう終わりか？ もうちょっと逃げてくれると思ったのよ」

先ほど言われた言葉を、山頂で佇むチビ女にそっくりそのまま返してやる。

オレの拳がチビ女の顔面を捉えてから、たったの数分。そのたったの数分で、ものの見事に形成は逆転していた。

予測していた通り、フラフラと逃げ惑うチビ女を追い詰めるのに、そう時間はいらなかった。木や茂みをよけて出て行った先にあったのは、地上から別離された空中という袋小路。もはや為すすべもなく、チビ女に残された道はオレに許しを得ることだけのはずだ。

チビ女をさらに追い詰めるために、一歩踏み出す。

その瞬間、目の前のチビ女から異様な雰囲気を感じた。

山の頂上付近、この村を見事に一望できる岩場。その岩場の先端で、火野まあ子は赤く染まっていく天之恵を見下ろしていた。

一瞬、そこにいるのが本当にあの火野まあ子なのか、わからなくなった。

そこに居たのは、いつものヘラヘラした表情のヘンタイチビ女ではなく、深刻な表情を浮かべた、初めて見る女だった。

幼い子供のような顔に、やけに大人びた表情が浮かぶ。その矛盾が、オレの中の何かに引っかかる。

思わず、こつ尋ねずにはいられなかった。

「……お前、誰だ？」

「何言ってるんのシユウちゃん。まあ子だよ。火野まあ子。毎日顔合わせてるのに、忘れちゃったのかな。ひどいね」

火野まあ子だと名乗るその女は、火野まあ子らしからぬ落ち着い

晴れのち曇り、ときどき魔法。

た言葉で、そう答えた。

第十話 : 赤く染まる罪と景色

夕焼けからこぼれる赤い光が天之恵を包み込んでいく。

赤く染まる景色を見つめながら、オレはこの村の地を初めて踏みしめた時のことを思い出していた。バスから降りてたったの数秒後に見た、あの光景を。

煌々と燃え盛る、火柱の魔法。

いきなり火柱が立つなんて異常現象に面食らいながら、あの時オレの心には不思議な感情が充ちていたのを覚えている。

火よりも熱く、炎よりも清楚で、緋よりも高貴な赤。

その赤に照らされながら、あの時オレの心を過ぎったものは、言いようのない懐かしさだった。

「赤ってキレイだね。キレイだけど、どこか寂しいんだ。なんでそう思うんだろう。なんでだろうね、シュウちゃん」

見渡す限りに広がる赤い景色から、声の主へと視線を戻す。

そこに居たのは、毎日イヤってほど顔を合わせている同級生でもあり、たった今初めて出会った女でもあった。

「……人の感受性なんてそれぞれだろ。お前の感覚をオレが説明なんてできるわけがねえ」

「そっか。そうだね。でも、なんでだろ。シュウちゃんだったら今のあたしの気持ち、わかってくれる気がしたんだ」

火野まあ子だと名乗るその女は、赤の景色に視線を向けたままそう答えた。

そのまま切り出す言葉もなく、オレたち二人は口を閉ざす。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

目の前に居るその女の顔はよく見慣れたもののはずなのに、うんざりするほど脳に突き刺さっていた声のはずなのに、何から何まで別人のような、そんな印象しか感じない。

そう、別人。

あえて言葉にするなら、それしか思い当たらねえ。

『アレは自らをそういう性格だと偽っておるところがあるでな』

火野の爺さんの言葉を思い出す。

普段のあいつの言動行動の全ては、あいつ自身が演じている『火野神社の巫女』としての『火野まあ子』だと、爺さんはそう言っていた。爺さんの言葉が真実だとしたら、今この場にいる『火野まあ子』こそが、本来の姿ってことか？

……納得いかねえ。

あのチビ女の今までの奇行の全てが演技だったなんて、オレには信じられねえ。

「おい、座敷童」

「なに、シユウちゃん？」

「……普通に返事しやがったな」

「普通にしちやダメなの？」

「ついさっきまでの『火野まあ子』なら、絶対普通には返事しねえだろうからな。ついでに、自分のことを『あたし』なんて呼び方もしねえしな」

「そっちの方がシユウちゃんは好きなの？」

「んなワケねえだろ」

「じゃあいいじゃない、普通で」

「……そうだな」

「そつだよ」

どこまでも、その女は火野まあ子らしからぬ言葉を並び立てた。

……全然納得いかねえし、なぜだか無性にむかつくけど、よくよく考えてみれば不満を口にするのもない。なにしろ、今のこいつとはまともな会話ができるんだ。今オレの中にあるこの女への疑問に対しての答えをもらうには、願ってもない絶好のチャンスだ。

少し間を置く。焦って動揺を表に出してはいけない。主導権を握るのはいつだって落ち着いて状況を把握する者の特権だ。この女にペースを握られるなんて、何よりプライドが許さねえ。

深呼吸。思考をクリアに。

この女に訊ねなければならぬことを、順序立てて組み立てていく。

「おい座敷童。まだ続ける気か？」

「続けるって、何を？」

「この意味のねえ鬼ごっこを、だよ」

「……そうだね。鬼ごっこはここで終わりだよ。もともとあたしは、シユウちゃんをここに連れてきたかったからずっと追っかけてきたんだし」

「なんでだ？」

「シユウちゃんはこの村、好き？」

その言葉と共に、その女はようやくこちらへと向き直った。

左頬の腫れがつい数分前の出来事の面影を残している。オレが思い切り殴りつけた跡だ。少し罪悪感が湧いてきたが、それと同時に不審な思いは益々強まっていく。

やはりこの女はオレがさっき殴りつけたあのチビ女と同一人物なんだと、納得せざるを得ない。

「……理由を訊ねたつもりだったんだが、なんで質問が返ってくるかな」

「この質問の答えが、そのままシユウちゃんの質問の答えになるから」

「ふん、オレがどう答えるかなんてとづくに知ってるって言い方だな」

「そうだね。きつとこう言うだろうなって、なんとなくわかってるかも」

かすかな笑みを浮かべる座敷童。その仕草も、オレの知っている火野まあ子の印象とはるかに掛け離れていた。

少しの間を置いて、その女は言葉を続ける。

「別に。どっちでもねえ」。そんな感じかな。どう、合ってる？」

「答えない、かあ。でもシユウちゃん気付いてる？ シユウちゃんが口ごもるのって、認めたくないけどその通りだって言う、肯定の意味の返事の時なんだよ。呆れてる時もそうだけど」

「あはは、無言。凶星なんだ」

「ちっ」

「あたしもね、この村が好き」

「オレは好きだなんて一言も言っただけぞ」

「シユウちゃんは否定の意見はハッキリ言うからね。『どっちでもない』って言うのは、シユウちゃんにとっては『まあまあ気に入ってる』って意味なんだよ」

「随分と決め付けやがるな」

「毎日毎日シユウちゃんのこと見てたからね。わかるよ」

「……………」

「ほら、肯定」

くすくす笑いながら、火野まあ子はオレに背を向け、再び赤い景

色に視線を移した。

岩場の先端に立ち尽くすその後ろ姿はやけに画になっていて、まるで昔からそこにあるもののような、その風景の一部だったかのような、そんな錯覚を受けた。

「あたし、シユウちゃんにもっと天之恵を好きになってほしいんだ。せつかくこの村に来たからには、もっとこの村を堪能してほしいんだ。だから、ここに連れてきたんだ」

「……この景色を見せるために、か？」

「うん。キレイでしょ、この景色。あたしのおきのおき場所なんだ、ここ」

そう言っつて、火野まあ子は一步踏み出した。

岩場の先端。その先にあるのは見渡す限りの赤く染まった世界。

もう二、三步踏み出せばそこからはもう別の世界。真つ逆さまに死へと連なる、黄泉の世界へ続く道。

その瞬間、オレの心に一片の不安が生まれた。

今のこいつはオレの知ってる『火野まあ子』とはかけ離れている。それはもう別人と言っつてもいい程に。

穏やかすぎる。この女は、穏やかすぎるんだ。

オレは知っている。自らの人生に幕を下ろそうとした人間の表情が、どうしようもないくらいに追い詰められた人間の表情が、意外な程に穏やかなことを知っている。

前に居た土地で、オレがイジメていた奴がそうだった。

本当にどこまでもオレの予測通りに動く奴だった。そこまで完璧に予測通りに動く奴も珍しかったから、オレは特にそいつだけに焦点を絞つてイジメていたんだ。

執拗に追いかけ、先回りし、逃げ道を無くし、他の者への干渉も

晴れのち曇り、ときどき魔法。

妨げ、ただひたすらに追い詰める。とどめは刺さない。そうしたらそいつの絶望の表情を見ることが出来ないから。追い詰めるだけ追い詰めて、ほんのちょっと逃げ道を用意してやる。そしてその先でまた別の罠を仕掛けておく。延々と、その動作の繰り返し。

あの時のオレは、自分の予測の力に酔っていたんだろう。物事がここまで思い通りに進むものなのかと、世界を手にしたかのような快感に酔っていたんだ。

そして、あの事件は起こった。オレがこの土地へと逃げてくることになった、あの事件。

追い詰められたそいつは、オレの目の前で、手首を切った。

とても穏やかな表情だった。絶望とか失望とか、そんなものを一切感じさせないくらい、穏やかな表情だった。

その時のあいつの表情と、目の前にいる女の表情がどこか似ている。

あの時の感情が湧きあがる。

抑えようのない絶望感。

吐き出してしまいそうな程の嫌悪感。

もう二度と味わいたくない後悔が、オレの心を覆い尽くす。

「おいッ！」

気付いたら、オレは焦りの表情と共にそんな言葉を吐き出していた。

「わ。どうしたのシユウちゃん、そんな大声出して」

「……いいからこっち来い。ゆっくりな」

チビ女のいる足場はそんなにしっかりしていない。ちょっとコケ

晴れのち曇り、ときどき魔法。

ただけでも足を踏み外しかねないんだ。そこからチビ女が落ちていく光景なんか見てしまった日には、オレはしばらく立ち直れないかもしれない。……あの時と同じように。

オレのその言葉をどう受け取ったのか　おそらく自分に都合のいいように取ったんだろうが　火野まあ子はくすりと微笑み、さらに一步踏み込んだ。

「……てめえ、オレの言葉が聞こえなかったのか？」

「ふふ、そんなに心配？」

「ざけんな。お前がどうなるうが知ったこっちゃねえんだよ」

「あらら、そうなんだ。でも、もし落ちちゃったとしても大丈夫なんだよ。この山は、この村は、なんだって受け止めてくれるから。土地神様はどんなことだって受け入れてくれるんだよ」

さらに一步踏み出す火野まあ子。

その足の前にもう踏み場はない。その先の一步を踏んだが最後、あいつは別の世界へ行ってしまう。

焦りと怒りがオレの胸の中を駆け巡る。

その先の一步を踏み出させてはいけない。にも関わらず、あの女はオレをからかうかのように穏やかな言葉を繰り返す。

なにが『土地神』だ。なにが『なんだって受け止めてくれる』だ。死んでしまったら何にもならねえ。まして、そこまで他人を追い詰めたオレの罪を誰が受け入れてくれるって言うんだ。

ふざけんな。ふざけんなよ……！

「本当だよ」

くるりと振り返り、火野まあ子は満面の笑みを浮かべながら、言った。

「今から証明してあげる、」

その言葉を聞いた途端に、オレには火野まあ子の次の行動が予測できた。できてしまった。

そんなこと、普通の奴ならするわけがない。普通なら、そんな穏やかな表情ですることじゃない。普通ならできない。できるわけがない。

「ただあの女なら、やる。」

瞬間、オレの足は動き出した。

頭で考えるよりも先に、まるで爆発したかのように、凄まじい勢いで地を蹴っていた。

普段はオレの予測なんか当然のように裏切るくせに、目の前のその女は、当然のようにオレの予測通りの行動を取っていた。

「土地神様の、愛ってやつを」

火野まあ子の身体がゆっくりと背後へと倒れていく。

両手を広げ、穏やかな笑みをこちらに向けながら、火野まあ子は赤い景色へとダイブした。

第十話　：　赤く染まる罪と景色（後書き）

次回最終話の予定です。年内には投稿する予定です。ちゃんと予定通りにいくかどうかは、……未定です。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

第十一話　：　祝福と歓迎の火柱

世界がゆっくりと廻っていく。

不変であるはずの時間の流れ。この世の中で唯一にして絶対の平等であるはずのそれは、音と共に流れを止め、色と共に現実味をなくした。

ゆっくりと倒れていく火野まあ子の身体。

恐れていたその光景は、まるでコマ送りのように少しづつ進み、オレの心にキリキリと棘を打ち付けていく。

あの時と、同じ痛み。

あの時オレの心に刺さった棘は、今も消えることなく突き刺さったままだ。

「まあ子ッ！」

音の消えた世界で、あの女の名前を叫ぶ。

肝心の相手はビックリしたような表情を浮かべただけで、倒れていく身体は支えをなくしてそのまま落ちていくだけ。

「くそッ、ふざけんなよッ！　ふざけんなーッ！」

全力で駆けているはずなのに、まるで重りを付けているように動きが鈍い。

なんでもっと速く走れない？　あの女までそんなに距離はないはずだろ。

ついさっき走り出したはずなのに、もうかなり時間が経ったように感じる。

もっと、もっと速く　、もう二度とあんな思いはしたくねえん

晴れのち曇り、ときどき魔法。

だよ。

『お主もアレと似ている節があるのう』

火野の爺さんの言葉が頭をかすめた。

オレとあの女が互いに自分を偽っていると、爺さんはそう言った。そうだよ、認めてやるよ爺さん。

普段ぶっきらぼうな口調でも、他人に無関心なように振舞っていても、オレはただの臆病者なんだ。単なるガキなんだよ。

他人をイジメるのはただのイタズラ。それで誰かの面白い反応が見られればそれだけでよかったんだ。それなのに、実際に誰かが傷ついたりするところを目の当たりにすると怖くて仕方ないんだ。

それでも生き方は変えられなかった。一度作った自分の殻をぶっ壊すことなんて、オレにはできなかった。オレにできたのは、後悔することと同じ末路を踏まないようにすることだけ。それでも前提が変わらないのなら、行き着く先は目に見えていた。

だから、オレは逃げたんだ。

誰もオレのことを知らない土地へ、誰もオレの罪を知らない土地へ、逃げたんだ。

場所はどこでも良かった。遠くならなおさら良い。とにかく、遠くへ。遠くへ。

そうしたたどり着いたのが、この土地、天之恵だった。

それで、結局このザマか？

オレはどこへ行ってもこうなる運命なのか？

周りにいる誰かをキズつけてしまうことしかできないのか？

オレにはずっと逃げ続けることしかできないってのか？

……ふざけんな、ふざけんな……！

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「ふざけんな、このクソツタレえええツッ!」

そう叫んだ瞬間、オレを取り巻く世界が色を取り戻した。重りを付けているようだった足が、今はまるで羽のように軽くなる。

……いや、違う。軽くなったんじゃない。世界の流れが元に戻っただけだ。それが証拠に、火野まあ子の身体が倒れていく速度までが増していく。

もう少し、もう少しだ。

あと少し、あとちょっとで、手が届く。

運命なんて知ったことが。そんなモンがあつたとしても、この手でぶち壊してやる!

この手が誰かをキズつけるだけのもんじゃないってことを、証明してやる!

だから、だから……届けえツ!

「シュウちゃん」

火野まあ子の穏やかな声が、オレの耳に届いた。

もう夕日は半分以上姿を隠し、天之恵を赤く照らしていた光をかすかに淡く残すだけ。

空高く、ポツポツと現れる星たちの光の群れ。雲のない空をキャンバスに、光の群れは点々と自らの存在を示していた。

そんな、今宵最初の星空を見上げながら、ふと呟く。

「……クソツタレ」

「ん？ シュウちゃん何か言った？」

寝転がるオレの隣で、ブラブラと足を宙に投げ出す座敷童。

……いや、宙に投げ出すってのは表現が違うな。それを言うならオレだって今まさに宙に身を投げ出している最中になってしまう。オレと火野まあ子は宙にいた。それは何かの例えなんかではなく、そのままの意味で。

「あー、そろそろいいか？ やっと少し落ち着いてきた」

「そろそろいいかって、何が？」

「この状況の説明に決まってるんだろ。なんでオレは生きてるんだ？ お前と一緒に岩場から落ちたはずなのに、なんでオレたちはこうしてケガ一つなく無事なんだ？ それより何より、なんでこうして宙に浮いてんだ？ と言うか、お前は最初からこうなることを知ってたあんなことしたのか？ それともこれはお前の仕業か？」

「土地神様の、愛の御業みわざさっ！」

ニカツと満面の笑みを浮かべながら、火野まあ子はそう答えた。

……オレの出した質問のどれにも答えとして当てはまってないように思えるのは気のせいかな？

「あたしたちは今『風雲』に乗ってるんだよ。知ってるよね、『風雲』のこと」

「……一人一人を簡単に吹き飛ばす程の突風の魔法だと思ってたんだけど」

「そついう『風雲』もいるけど、こんな感じの穏やかな子もいるんだよ。たまに乗せてもらうんだけど、やっぱり気持ちいいね」

晴れのち曇り、ときどき魔法。

そう言ってゴロンと寝転ぶ火野まあ子。気持ちいいどころか、いつ真つ逆さまに落ちるのかこっちは気が気でない。しかも少しづつ移動しているのがさらにオレの恐怖を煽る。

オレたちが落下した岩場が遠くに見える。こうして遠くから眺めてみると自殺の名所のようにも見えなくもない。

あんなところに向かってオレは突進してたのか。……そりゃ勢い余って落ちるよなあ……。

「あの岩場に向かう途中で『浮石』が出たでしょ？ だから今日も『風雲』が出るって実は知ってたんだ。まさかシュウちゃんが助けに来てくれるとは思わなかったけどね」

「……あの魔法は、オレの居場所を知るためにお前が発動させたのかと思つてただんだけど」

「あはは、それいいね！ 魔法少女まあ子ちゃん！ 決めポーズはこう？ こう？」

クネクネと不自然な方向に関節を曲げながら決めポーズを模索するその様子は、あの岩場での穏やかなそれではなく、いつものヘンタイ女のそれだった。

身体をクネクネさせながら、ヘンタイ女は言葉を続ける。

「『浮石』は道しるべの魔法だから、シュウちゃんがそう思つちゃつたのはしょうがないかもね。だけど、シュウちゃんは魔法について誤解してらあね」

「誤解？」

「魔法つてのはね、土地神様の愛なのさ。土地神様の愛は平等なんだよ。誰かにだけえこひいきなんてしない。もちろん、あつしにもね。と言うことは、どういうことだかわかるかい？」

「……あの魔法は、オレにとつても道しるべだったってことか？」

「ピンポン、大正解！ はい、ご褒美の飴ちゃん」
「いらねえし」

オレが否定の返事をする、火野まあ子はポケットから取り出した飴玉を嬉しそうに口にほうばった。

それからしばらく無言が続いた。

飴を舐めているからか、火野まあ子は何もしゃべらない。オレももう訊くべきことはさっき勢いにまかせて全て訊いてしまったし、どうせ今は何を訊いても飴に夢中で答えないと思ったからだ。

何もすることがなく、オレたちは沈んでいく夕日をただジッと眺めていた。

夕日を見ながら、火野まあ子はポツリと呟く。

「あたしね、捨て子だったんだ」

その口調があまりにも穏やかで突然の告白だったから、一瞬意味を取り違えそうになってしまった。

『風雲』に座るようにして夕日を眺める火野まあ子の横顔は、あの岩場で見た時と同じ穏やかな表情に変わっていた。

「火野神社に捨てられた赤ん坊、それがあたし。火野の家には子供がいなかったから、あたしはそのまま火野の子供として育てられたんだ」

「……………」

「む。今のはわかんないなあ。肯定？ それとも呆れてる？」

「さあな。どっかから何か独り言みたいなのが聴こえた気はするけど」

「そっか。優しいね、シュウちゃん」

少しだけ微笑んだあと、火野まあ子の独白は続く。

「誰が両親なのかは今でもわかんない。この村にはその頃子供を身ごもってる人はいなかったらしいから、もしかしたら村の外の人なのかもね。誰だろうと今さら関係ないけど。あたしの家は、あの神社以外にないんだから」

その時、夕日は完全に姿を消した。

辺りを照らすのは空に浮かぶ光の群れと、一際目立つ、いびつな円を描く月。

月がいびつに見えるのは、月齢のせいか。それとも今のオレの心境のせいか。

月明かりでかすかに見える火野まあ子の横顔。その表情はやはり、穏やかだった。

「なんであたし、捨てられたのかな。きっと必要とされてなかったんだね。要らないのに生まれてきちゃった子。そんな要らない子だね、火野の家とこの村は受け入れてくれた。だから恩返ししたかったんだ。あたしを受け入れてくれた火野の家とこの村と、そしてこの土地の神様にも感謝したかった。だから、あたしは巫女になったんだよ」

こんな非常識な村にある神社でも、やはり祭事や神事の儀式の際に巫女がないことは負担になっていたらしい。進んで巫女になるうとする者も例の『精神がおかしくなる』とかいう理由を恐れて、この村には誰一人としていなかったそうだ。

「この村の生まれじゃないあたしが、この村に足りなかった部分を補うことができるなんて、偶然にしても出来すぎだよ。だから思ったんだ。土地神様は、きっとあたしのためにその場所を空けておいてくれたんだって、あたしの居場所を作ってくれてたんだって」

「……」
「さつき言つたよね、土地神様の愛を証明するって。捨て子だったあたしを、そしてあの岩場から落ちたあたしとシユウちゃんを、土地神様は受け止めてくれたよ。他にもね、シユウちゃんが土地神様に受け入れられた瞬間をあたしもシユウちゃんも一緒に目撃してるんだよ」

「一緒に目撃した？ そんな覚えねえけど」

「火柱、一緒に見たよね？」

「ああ、この村を案内してもらった時のことか」

「シユウちゃん、魔法にはそれぞれ恩恵があることは知ってる？」

神社の蔵の中の文献に載ってたはずだけど」

「……なるほど、そういうことか」

この村を異常たらしめる最大要因 『魔法』。その魔法にはそれぞれ恩恵が込められている。さつき見た『浮石』には『行くべき道を指し示す道しるべ』。今オレたちが乗っているこの『風雲』にも『災いを運び去る』という意味が込められているらしい。

しかし、これらには裏の意味も含まれている。

晴れも長く続けば干ばつになり、雨も降り過ぎれば洪水を起こす。自然現象が恵みと災いの二つの顔を持っているように、魔法にも裏の意味があるんだ。

『浮石』は道を指し示す魔法。だが、その先にあるものが望んだものであるとは限らない。その先で災いが待っていないとも限らないんだ。

『風雲』は災いを運び去る魔法。しかし、別の場所から運んできた災いを降り注ぐことだってあり得る。

そんな魔法の中でただ一つだけ、災いの意味がない純粋な恵みの魔法がある。それが、オレがこの村で最初に見た魔法、『火柱』。そして、その恩恵とは。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「確か『生命の祝福』だったな。新しい命や豊穡を約束する、誕生の魔法」

「そう。新しい命への祝福、そして歓迎。『火柱』だけは、この村でも滅多に起こらない稀有な魔法なんだよ。この村の人だって一度も見たことがない人が大勢いるのに、この村に来てたった数日のシユウちゃんが『火柱』と遭遇できたってこと、どういうことだからわかるよね」

「……………」

………… オレという新しい住人を、この土地が歓迎してるってことか…………？

「うん、その通り」

「………… 勝手に人の考えを読むな」

「だって無言だったし。今のは肯定の意味の無言だよね」

「ふん」

寝転がったまま、空を見上げる。夕日が沈んだことで光の群れはより一層輝きを増す。

先程まではいびつに見えた月はもう、いつもの見慣れた姿に変わっていた。

「あゝあ、完敗だよ完敗。オレの負けだよ」

何に對してか、誰に對して言ってるのか、口にしたオレ自身もよくわからない。

でも、それは多分正解。

誰かや何かに特定した言葉ではないことは、オレと共に空を見上げているチビ女も、おそらくはわかっているだろう。

生まれて初めての完敗宣言。しかし、不思議と気分は晴れやかだ

った。

「……シユウちゃん。完敗ついでに一つお願いしてもいいかな？」

「おお、いいぞ」

「うわ、即答だね。まだ内容も言っていないのに」

「いいんだよ。今はなんだかそんな気分なんだ」

何かに充たされたような、ずっと背負い続けていた荷物をほんの少し減らせたような、そんな爽快感が心を充たしている。今なら多少ムリなお願いでも、すんなりと聞いてやれそうな気がする。実際にやるかどうかは置いて、だけど。

「さっさと言えよ。今言っておかねえと後になっても絶対聞かねえからな」

「う、うん。……あ、あのね、その……」

なぜかもどかしそうに、火野まあ子は言葉をにこした。

この女が言葉に詰まるとこんなか初めて見た。一体どれほどのヤバイ願いを口にするつもりなんだろうか？

気分だけで承諾したのは少しばかり軽率だったかと後悔し始めたその時、火野まあ子は顔を伏せながら、願いを告げた。

「……もう一回、もう一回だけね、さっき助けに来てくれた時みたいに、……まあ子って、呼んでもらえる、かな……？」

恥ずかしそうに言葉を紡ぐ火野まあ子。

その姿と言葉に、不覚にも、一瞬とは言え、この女のことをかわいいと思ってしまったのは、一生の秘密だ。

最終話 : 晴れのち曇り、ときどき魔法

やかましい程のセミの鳴き声が、教室の中まで響き渡る。

やけに存在感を出しまくっている入道雲は、これまた存在感出しまくりの太陽の光を反射して、存在感と季節感をダブルで演出していた。

前に居た土地でならそんな光景を見ることもなかった。高いビルや建築物に視界を阻まれて、さらに空を見上げることに妙な抵抗があつて、そこにあるはずの景色に気付くことは出来なかったから。

この土地には高いビルや建築物なんかももちろんない。あるのは山と川と畑、そしてそこに住まう少し変な住人たち。

なにせ、奴らは目の前で火柱が立つても岩が宙を猛スピードで飛んでいっても手を合わせていいものを見たとか言つて喜んでるんだ。……な、変だろ？

そんな住人たちの中ではオレの妙な抵抗なんかむしろまともな方なんじゃないかと思えてきてしまう。だから今は、空を見上げることに抵抗などはない。

空を見上げる。たったそれだけの行為が、いろんなことを気付けてくれる。

今までのオレの視界は本当に狭かったんだと、壁を作っていたのは自分自身なんだと、誰が語りかけてくるわけではないが、ふと気が付かされる。

今までオレが取ってきた『逃げる』と言つ行動は、本当にもつたいない行為だった。妙な意識にジヤマされずちゃんと向き合っていたら、オレの中の壁はもっと早く崩れていたはずなのに。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「シユウちゃんシユウちゃんシユウちゃん！ 今日はいくから時間あるかい！？」

「ねえな。先約がある」

「うお、即答すか！ いやん、いけず。ホントは何にも予定なんかないくせにこのスケコマシ！」

放課後の教室。いつも通りの火野まあ子。そしてオレの元に集まる何人かのクラスメイト。その中にはあのボサボサもいる。最近知ったことだが、ボサボサの本名は『熊ノ介』と言っらしい。……名は体を表すと言うが、眉毛にも表されるもんだとは、初めて知ったな。

「中津くん、今日もうちの部に来て指導してよ！ 中津くんの指す手、どの本の定石にも載ってない手だから参考になるのよね」

「シユウくん、今度の昼ご飯おごるからこの問題解いてくんない？ 来週までに解いてこなかったら僕、ゴリ先生と一ヶ月マンツーマンで補習させられるんだよ！」

「いや、俺らんとこ来てくれよ！ 最近下級生でとんでもねー強い奴がいてよ、手に負えないんだよ！ 上級生のメンツを保つためにも、頼む！」

ボサボサを含め、何人かのクラスメイトがオレの放課後の予定を奪い取るうと寄ってくる。……たく、今日は先約があるって言うてんのに。

「ダメダメダメダメ！ あっしはもうシユウちゃんと三日も一緒に帰ってないんだから今日のシユウちゃんはあっしのもんさ！ みんな帰れ！ 散れ！ くだばれ！」

「え〜〜！」

火野神社の巫女の権威、発動。

このヘンテコな村は、とあるヘンテコな理由で、巫女である火野まあ子には逆らえないことになっている。オレからすれば口にするのもバカバカしい理由なんだが、この村の住人にとってはそれが村ぐるみでの暗黙の了解となつているのだからおかしなものだ。

この村に巫女を置かなかつた理由はおそらく前にオレが思った理由で当たっていると思うが、この村の住人はそのことを考えもしなかつたのだろうか？ やはり視野の狭さつてのは、ある意味、罪だよな。

「みんな、こいつの言うことは聞かなくていいから。だけどゴメンな、今日は先約が入つてんだ。明日以降でよければ、オレにできる限りは付き合うから」

「言つたな！ じゃあ明日は付き合えよ中津！」

「やっぱり中津くん、頼りになるね」

「じゃあまたね、シユウくん」

集まつたクラスメイトたちをなんとか帰し、一息つく。

転校初日に作つてしまつた壁をブチ壊そうと、クラスメイトたちと向き合うことを心がけているいろいろ接してきたが、思いのほか反応が良すぎるのは計算外だつた。初めはオレをまだ外から来た人間だと意識してたのかやや敬遠気味だつたが、一緒に行動しているうちにあつと言う間に馴染んでしまつたようだ。この土地の村民性つてやつなのだろう。基本的に、人懐こいのだ。

『この村は、何だつて受け入れてくれるから』

ひと月前の火野まあ子の言葉を思い返す。

アレ以来、あの時の穏やかな火野まあ子は現れなかつた。『風雲』から降りて別れる時にはすでに、火野まあ子はいつものハイテンシ

晴れのち曇り、ときどき魔法。

ヨンなヘンタイ女へと戻っていた。

隣にいるチビ女へと視線を向ける。

まだ何人かオレの勧誘をあきらめきれない数人に向かって、チビ女は「うう〜！」と唸り声をあげて威嚇していた。犬かよお前は。

威嚇を続けるチビ女の頭にゲンコツを落としながら言う。

「ほら、帰るぞ座敷童」

「へ？ アレ？ 用事はいいんすか？」

「オレが用事があんのはお前の爺さんだからな。目的地が一緒なら同じことだろ」

「うっしや！ ナイスだじっちゃん！ 今夜はまあ子のおかずを一品あげるさ！」

ガッツポーズを取る座敷童。その姿には、やはりあの時の穏やかさは微塵も感じさせなかった。

「なあ、今さらだけど、訊くぞ」

「うん？ なあにシユウちゃん？ スリーサイズなら企業秘密だよ

！でも今なら超特価で二十円で教えてあげるさ！」

「それはどうでもいいんだけど」

「あひゃひゃひゃ、素直じゃねえなあコンチクショウ！ んで、なあに？」

火野神社へと向かう道中、あの日以来ずっと心に留まっていた疑

問をぶつけてみることにした。

「あの時の穏やかなお前と今のムチャクチャなお前、どっちが本当のお前なんだ？」

「うん？ 意味がわかんないなあ」

「ウソつけ。わからねえわけねえだろ」

「ウソじゃないよ。だってあっしは特に意識してどっちかを使い分けてるってワケじゃないもん」

「傍から見てたオレにしてみれば別人に思えるくらいかけ離れてただけだ。……もしかしてお前、二重人格か？」

「違うよっ！ アレもまあ子だし、今のあっしだってまあ子だよ！ どっちかが本当のまあ子じゃなくて、どっちもきちんともまあ子なんすよ！」

「……納得いかねえ」

「あひやひや、わかってるよシユウちゃん、こう言いたいんだね。」

なんてミスティアスな子なんだ、まあ子！」

座敷童の妄言をサラリと受け流して、火野神社への階段を駆け上がる。後ろから何かヒステリックな声が聴こえるが、気にしたら負けだ。

階段を半分くらいまで駆け上がってから後ろを振り返る。火野まあ子は三段飛ばしで階段を駆け上がり、オレのすぐ隣にきていた。あの強靭な足はこの階段で培われたのかと納得しかけたその時、ふと火野まあ子の雰囲気が変わっているのに気付いた。

「……お前か」

「うん？ 何が？」

並び立てている言葉はヘンタイ女と同じもの。しかし、口調と雰囲気はやはり違う。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

あの岩場で現れた、オレの知らない火野まあ子。
あの日以来一度も姿を見せなかったあの火野まあ子が、今こうしてオレの隣にいた。

「もう一度訊く。今のお前といつものお前、どっちが本当の火野まあ子なんだ？」

「じゃあもう一度答えるね。どっちも真正銘の火野まあ子だよ」

その言葉と共に、火野まあ子は三段飛ばしで階段を駆け上がった。そして振り返る。

「あたしからもシユウちゃんに質問。魔法には良い意味と悪い意味の二つ受け取り方があるけど、どっちが本当かなんて、区別があると思う？」

「……ねえな、そんなもん」

「そう、日照りが続いて干ばつが起こったって、誰も空にあるお日様がニセモノだなんて言わないのと同じこと。恵みがあったって災いがあったって、魔法は魔法。土地神様の愛以外の何者でもない。同じように、あたしはあたし。火野まあ子以外の何者でもないんだよ」

「それにしたって、普段のヘンタイぶりと今のお前じゃ全然キャラが違うぞ」

「だから言ったでしょ。特に意識してるわけじゃないんだってばさ。ほっ」

最後の一步で一気に階段を昇り終えた火野まあ子。最後の一步は、五段飛ばしだった。

そして見下ろす視線が『どちら』のものなのか、オレには判別できなかった。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「あたしだからできることもあるし、あつしだからできることもあるのさ！ 何しろあつしは火野まあ子っ！ 火野神社の初めての巫女さんやからね！」

なぜか最後だけ関西弁で言い切って、火野まあ子はいつもの元気一杯の表情で笑った。

「なるほどの。まあ子がそんなことを言うと思ったか」

座布団の上で背中を丸めて座りながら、火野鷹仁は厳かに呟いた。このひと月、オレなりに考えたことがあった。魔法のこと、この村のこと、自分自身のこと。まだ結論は完璧には出せてはいないが、オレの考えをこの爺さんにだけは言っておく必要があった。

「それは人間全てにあてはまることじゃの。卑しい自分、慈愛に充ちた自分、賢い自分、愚かな自分、どれもひっくり返して全てが自分じゃて。そのどれが欠けても現在の自己はあり得ないものじゃろも。どれか一つがあつてこそ救われることもあるし、うまくいかないこともある。アレは、すでにそのことを知っておるのじゃな。強い子さね」

「……よく本当のことを伝える気になりましたね。あいつが捨て子だつたつて教える必要はなかったのに」

「そうかの？ 自分の出生を知るとは自分を見つめることの初歩じゃての。自分を見つめることをしないのなら、そちらの方が難儀

さね。見失うのも道の一つじゃが、見定めるのは常に自分じゃて」「……今ならわかります。オレもこの間まで、見失ってましたから」「ほう。この間まで、とな。では、今は見定めておるのかの」「はい。以前よりは」

背筋を伸ばす。これから発する言葉に少しでも心がこもるように。自信を持って。オレはもう逃げていない。きちんと向き合っている。

『この村の生まれじゃないあたしが、この村に足りなかった部分を補うことができるなんて、偶然にしても出来すぎだよね。だから思ったんだ。土地神様は、きっとあたしのためにその場所を空けておいてくれたんだって、あたしの居場所を作ってくれてたんだって』

あの時の火野まあ子の言葉を思い出す。

土地神とやらがもし、このオレにも居場所を空けてくれているなら、オレの居場所を作ってくれているのなら、オレができることはこれしかない。

「オレは、この神社の宮司になろうと思ってます」「ほう」

「魔法について、もっと調べたいんです。もっと知りたいんです。もっと理解したいんです。そしてそれを皆のために役立てたい。それがオレの、この村への恩返しです」

それこそがオレの出した結論。オレの見定めた答えだ。罪を背負ってただひたすら逃げてきたオレを歓迎してくれた、あの火柱。あの優しく温かい赤を見た時から、こうなることは決まっていたのかもしれないな。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

「……ただ、宮司つてどんな仕事すんのか全然わかんねえし、今までそういうこととは無縁で生きてきたんで、宮司というポジションでなくても魔法研究者とかでも全然いいんですけど……」

「ふあふあふあ、かまわんかまわん！ ワシもこの神社に生まれて八十余年経つが、いまだにようわからんことの方が多からう！」

「……そんな人がよく神主できますね」

「この村は普通とは違うからの」

「自覚はあるんすね」

「ふあふあふあ！ 相変わらずハッキリ言うのうボウズ！」

実に嬉しそうに、火野の爺さんは豪快な笑い声をあげた。
しかしすぐに真顔になって、

「まあ子はすぐには嫁にやらんからな」

そんなことを言った。もちろん、丁重にお断りしたが。

もしも生きていることに疲れたなら。もしも何かから逃げたくな
ったら。

おすすめしたい場所がある。変な名前の土地だから、すぐに覚え
られるはずだ。

天の恵みと書いて天之恵あまのえと読む、その土地。

そこにはヘンテコな住人と、ヘンテコな自然現象と、ヘンテコな
巫女がいる。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

正直、引きまくるだろう。

この村への第一印象が悪いのは、君がまだマトモな人だと言う証拠だと思ってくれればいい。

もしかしたらヘンテコな巫女服姿のチビ女が、君を村中連れまわすかもしれない。

そのうちに家に泊まりに来いとか言っつて、ヘンテコな神社に連れてこられるかもしれない。

そしたらその時、話してやるよ。この村の、ヘンテコな秘密を。

『とんでもない田舎』と聞いて、どんな想像をする？

遊ぶところがない？ つまらない？ 退屈で死にそう？ まあそんなところだろう。

でもここは違う。はっきりと断言できる。

この村は、そのままの意味でのとんでもない場所なんだ。
なにしろこの村には、『魔法』が存在するんだから。

(終)

最終話 : 晴れのち曇り、ときどき魔法(後書き)

本作を最初から最後までお読みくださった皆様、そして最終話だけチヨイ読みしてくださいました皆様、どちらもありがとうございます！
作者の鮎坂カズヤです！

ファンタジーもので話を作ってみようと思って、ファンタジー物語の王道である『魔法』を基盤に短編を考えてたんですが、思いがけず話が広がってしまい、こういう感じになってしまいました。

物事は順調に進むことも全然うまくいかないこともありますよね。『魔法』って聞くと何もかも全てをうまく収めてしまうものに聞こえますが、何の等価もなしに無条件でそうになってしまうのは不自然だと思っんです。

そういう理由もあって、今回の話では魔法≠自然現象という設定にしました。

自然現象には良い面も悪い面の二つの顔があります。それって、私たちの生活においても同じこと言えますよね。

良いことも悪いことも全部ひっくるめて『生きること』。それを言いたかったんですけど、単にファンタジーとして面白ければそれでもいいかと途中からテーマがどうでもよくなったのは、作者のイタズラ心です

もう一つ同時進行で長編話を書いているんですけど、遅筆の人は長編同時進行はやめた方がいいですね。一人で勝手に焦って意味の

晴れのち曇り、ときどき魔法。

晴れのち曇り、ときどき魔法。

わからない文章が出来上がる時があります。今作でそういう部分がないかどうか、少しヒヤヒヤしています。

それでは最後に！ 『晴れのち曇り、ときどき魔法。』をお読みくださった皆様、このあとがきまでご覧になってくれた皆様へ感謝の気持ちを込めて！

ありがとうございました！

鮎坂カズヤでした！

晴れのち曇り、ときどき魔法。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5263c/>

晴れのち曇り、ときどき魔法。

2009年3月24日10時38分発行